愛媛県松前町横田遺跡Ⅴ区調査報告書

2008

松前町教育委員会

愛媛県松前町横田遺跡Ⅴ区調査報告書

平成20年

松前町教育委員会

東から見た横田遺跡Ⅴ区全景

序　　文

松前町は、松山平野の南部に位置し、西は豊かな瀬戸内海に面し、東に霊峰石鎚山を望む重信川氾濫源に開け、古来より海上交通の要所として、発展して参りました。

今回、楠池改修に伴い、伊予郡松前町横田地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

今回の調査は、比較的天候にも恵まれ、予定どおり作業を終了いたしました。ここに、発掘調査員として指揮をとられた愛媛考古学研究所・長井數秋氏、その補助並びに作業に当たられた皆様方の御苦労に感謝申しあげますとともに、各関係機関、地元の方々の多大なるご協力に、厚く御礼申しあげます。

なお、本報告書が埋蔵文化財の保護保存、また教育文化の向上に幅広く御活用いただければ幸いに存じます。

平成２０年３月10日

松前町教育委員会
教育長　永見　修一

例　　言

1　本書は、愛媛県伊予郡松前町に所在する横田遺跡Ｖ区の報告書である。

2　調査は、松前町教育委員会社会教育課の管理の下、株式会社セットアップが実施した。

3　調査概要は次の通りである。

遺　跡　名　横田遺跡Ｖ区
所　在　地　愛媛県伊予郡松前町大字横田１番
受 託 期 間　平成19年　２月　７日～平成20年　３月10日
現 地 調 査　平成19年　２月　７日～平成19年　３月20日
調 査 組 織　主任調査研究員　　長井數秋（愛媛考古学研究所）
調査担当者　調 査 主 任（埋蔵文化財調査士）　利屋　勉（株式会社セットアップ）

4　本書の執筆・編集は、広実敏彦・利屋　勉・兵藤千晶が担当した。

5　委託業務は次の通りである。

発掘調査業務　　株式会社セットアップ
整 理 業 務　　株式会社セットアップ

6　出土遺物、調査記録類については、松前町教育委員会社会教育課が、一括管理している。

7　発掘調査および本書を作成するにあたり、㈱セットアップ社員及び作業員の協力を得た。（順不同・敬称略）

現場作業
山田エミ・吉金周介・菅　功・徳野俊三・金子静江・金子スミ子
遺物実測
兵藤千晶・沖野　実
遺物デジタルトレース
山崎洋子・渡部邦男・社会福祉法人来島会クラフトマン
遺物写真
兵藤千晶・広実敏彦

8　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の職員が担当した。

松前町職員
重川善彦（生涯学習係長）・三原三千夫（主任）・佐藤真一（主任）

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。
　　SK・・・土坑　SD・・・溝　SP・・・ピット　SX・・・性格不明遺構
2　遺構の方位は国家座標に基づく真北を示し、標高は海抜標高を表し、単位はmである。
3　遺構実測図は1/20～1/150の縮尺で採録し、各スケールを入れた。
4　遺構図中の遺物実測図は、原則として1/２で採録した。
5　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
6　遺物実測図・拓本は、1/１～1/２で採録し、各スケールを入れた。
7　遺物実測図の中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ベタで表示した。
8　遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推測値を示している。
9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産技術会議事務局監修の『新版基準土色帖』に拠った。
10　遺物写真の縮尺は1/1で掲載した。

本文目次

Ⅰ　調査の経緯・・1
　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　遺跡の環境・・1
　地理的環境・・1
　歴史的環境・・3
Ⅲ　調査の概要・・6
　試掘調査・・・6
　本調査・・6
　調査の結果・・6
Ⅳ　遺構と遺物・・9
　1.溝状遺構・・9
　SD01 遺構・・9
　　遺物・・・12
　SD02 遺構・・17
　　遺物・・・18
　2.土坑・・・22
　SK01 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　SK02 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
　　遺物・・23
　3.性格不明遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　SX01 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　　遺物・・24
　4.小穴・・・25
　SP01 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　SP02 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　SP03 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　SP04 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　SP05 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　SP06 遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　5.遺構外出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

Ⅴ　まとめ・・29

挿図目次

図－1　調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
図－2　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
図－3　調査区全測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図－4　基本層序北壁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
図－5　SD01 平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図－6　SD01 南北ベルト断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図－7　SD01・02 出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図－8　SD01 東側出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図－9　SD01 出土　01～06 縄文土器実測図・・・・・・・・・・・13
図－10　SD01 出土　07～11 弥生土器実測図・・・・・・・・・・・14
図－11　SD01 出土　12～14 土師器実測図・・・・・・・・・・・・14
図－12　SD01 出土　15～18 須恵器実測図・・・・・・・・・・・・14
図－13　SD01 出土　19～21 石器実測図・・・・・・・・・・・・・15
図－14　SD01 出土　22～24 石器実測図・・・・・・・・・・・・・16
図－15　SD02 平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図－16　SD02 ベルト断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図－17　SD02 出土　25～30 弥生土器実測図・・・・・・・・・・・19
図－18　SD02 出土　31～32 土師器実測図・・・・・・・・・・・・19
図－19　SD02 出土　33～35 須恵器実測図・・・・・・・・・・・・19
図－20　SD02 出土　36～38 石器実測図・・・・・・・・・・・・・20
図－21　SD02 出土　39～41 石器実測図・・・・・・・・・・・・・21
図－22　SK01 平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図－23　SK01 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図－24　SK02 平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図－25　SK02 断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図－26　SK02 出土　42 須恵器実測図・・・・・・・・・・・・・・23
図－27　SX01 平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
図－28　SX01 出土　43 古式土師器実測図・・・・・・・・・・・・24
図－29　SX01 出土　44～45 石器実測図・・・・・・・・・・・・・24
図－30　SP01 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－31　SP02 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－32　SP03 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－33　SP04 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－34　SP05 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－35　SP06 平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図－36　遺構外出土　46～49 弥生土器実測図・・・・・・・・・・・27

図－37　遺構外出土　50～51土師器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図－38　遺構外出土　52～53須恵器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
図－39　遺構外出土　54～55石器実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

表目次

遺物一覧・・・30

図版目次

巻頭図版　東から見た横田遺跡Ｖ区全景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・巻頭
図版1　調査前状況(西より)・遺構検出状況(東より)・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図版2　出土状況(西より)・北壁土層堆積状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図版3　SD01遺物出土状況(西より)・SD01完掘状況(東より)・・・・・・・・・・・・・35
図版4　SD01遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
図版5　SD02遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
図版6　SD02遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
図版7　SD02遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
図版8　SD02遺物出土状況・SX01遺物出土状況・作業状況・・・・・・・・・・・・・・40
図版9　SD01出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図版10　SD01出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
図版11　SD01出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図版12　SD01出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図版13　SD02出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
図版14　SD02出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
図版15　SD02出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
図版16　SD02出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
図版17　SK02・SX01出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図版18　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
図版19　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

Ⅰ　調査の経緯

調査に至る経緯

愛媛県伊予郡松前町(以下「松前町」)は、平成１８年度に溜池(楠池)堤防改修工事を計画した。これに伴い、伊予郡松前町横田の同改修予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「横田条里制遺跡」に含まれていることから、工事に先立ち埋蔵文化財の有無等を確認するため、同予定地内の試掘調査を行うこととなった。試掘調査は平成18年10月25日･26日に行われた。その結果、調査地内に設定したトレンチ内より、弥生時代と思われる遺構・遺物が確認された。このため松前町教育委員会は発掘調査を実施することとなり、平成19年２月から３月にかけて調査が行われた。遺跡名は、近年の周辺の遺跡の発掘調査との関連から「横田遺跡Ｖ区」と呼称することとした。

Ⅱ　遺跡の環境

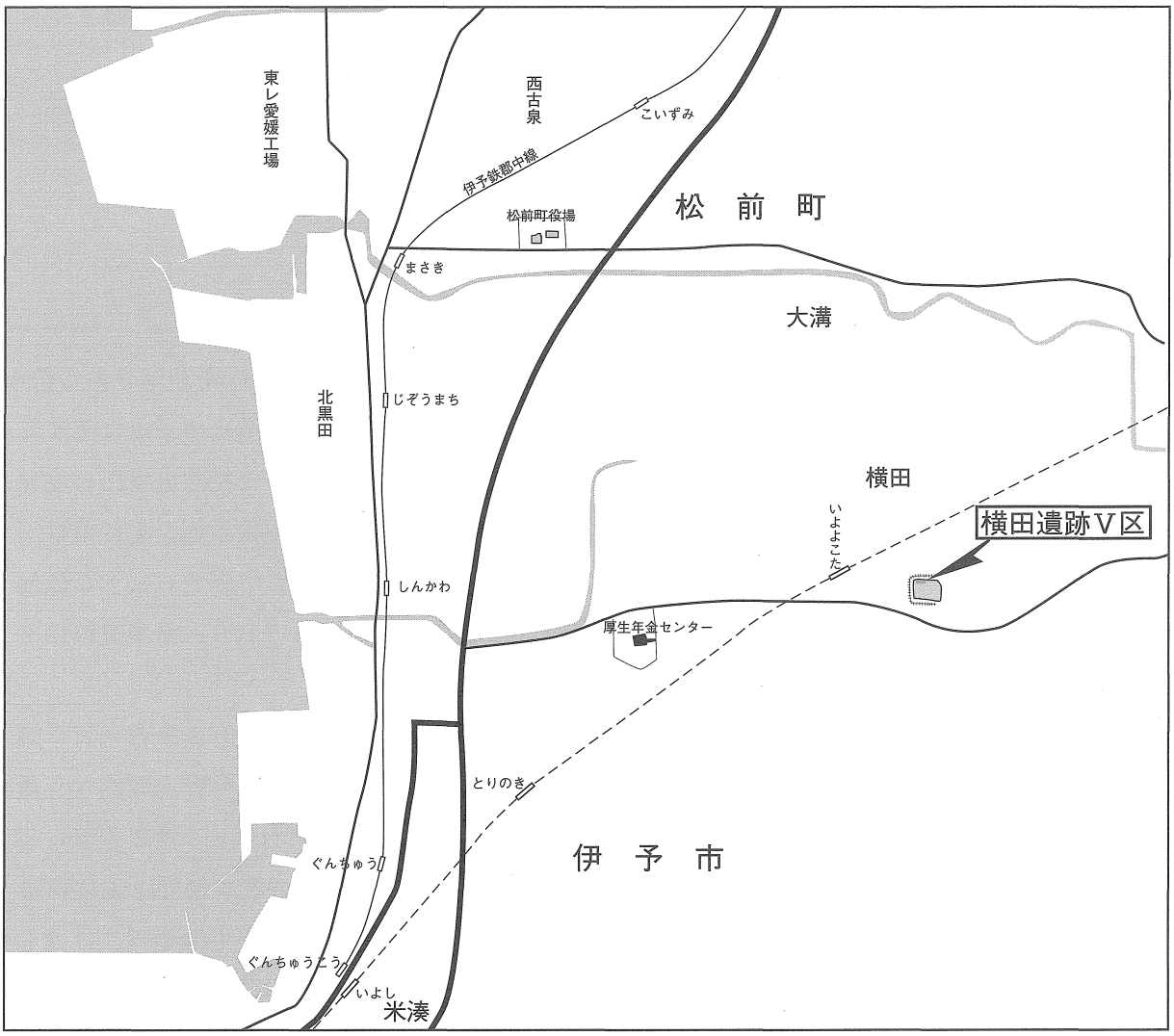
地理的環境

調査区の位置する伊予郡松前町横田は愛媛県の中部(中予)に位置し、県庁所在地である松山市に接し、松山平野の西南部にあたる。西は伊予灘に面し、東は砥部町、南は伊予市に接する。

本遺跡の西部は小規模な用水路と畦が南北に走り、これが伊予市上三谷と松前町横田の境界線となっている。松山平野は、北方の高縄山地と南方の石鎚山系の三角州状の地を主に重信川が堆積涵養した扇状地と三角州の沖積平野である。西部では重信川を挟んで南北に広大な低地帯を展開し、松前町はその南部を占め、その南縁は伊予市の山麓に及んでおり、横田遺跡はその東部に位置する。

横田遺跡の南には中央構造線がほぼ東西に走行し、地帯構造的にはこれより南を西南日本外帯、北を西南日本内帯と区別している。したがって横田遺跡の位置する松山平野南西部は、西南日本内帯に属する。中央構造線の北部には谷上山(標高445.5ｍ)から行道山(標高43m)、金松山(標高257m)に伸びる和泉層群からなる山塊が形成されている。この和泉層群は和泉砂岩と頁岩の互層からなっている。本遺跡の東部を北流する大谷川の最上流は中央構造線には達していない。そのため、地層が比較的軟弱であり、大谷川の最上流部では崩落の激しい和泉層群を大きく開析し、その土砂が運搬作用によって山麓や河川周辺に厚く堆積している。横田遺跡

周辺の土壌は、この和泉層群の砂岩層の風化土であり、これに頁岩の風化土が僅かに混入するのみである。したがって今回出土した、結晶片岩・安山岩製の石器は他地域から人為的に搬入されたものである。大谷川をはじめ、本遺跡周辺の河川は大半が天井川であり、いずれも集水面積が小さく水量が極めて少ない。降雨があっても河床面が急傾斜であり、一度に流出するため欠水地帯となっている。このため農業を行うには、溜池が必要である。周辺には多くの溜池が存在する。



図－１　調査区位置図

歴史的環境

1　旧石器時代

松前町周辺における旧石器時代の遺跡としては、伊予市岩崎池や征露池があり、ともにナイフ形石器や尖頭器、剥片などが発見されている。この他、大谷川右岸の猿ヶ谷古墳上からも角錐形石器１点と剥片が、本遺跡の南東に分布する平松遺跡からも細石核が１点発見されている。今後調査が進めば、同時代の遺跡が発見される可能性は高い。

2　縄文時代

松前町周辺における縄文時代遺跡は自然条件に恵まれているものの、旧石器時代同様あまり明らかにされていない。伊予市上三谷石橋地区の圃場整備事業に先立つ発掘調査で、若干の縄文時代後期の土器が発見されたが遺構の検出までには至っていない。晩期になると、本遺跡の南西 200m 程の伊予市片山遺跡から、深鉢形土器を伴う土坑が１基発見されているが、これ以外の遺物、遺構は未発見であるため遺構の性格は不明である。しかし、低湿地で晩期の遺構、遺物が発見されていることからすると、本遺跡周辺に大規模な遺跡の存在が想定される。この他、松前町神崎からも縄文土器片と、大分県姫島産黒曜石の石鏃が発見されている。

3　弥生時代

この時代になると、多くの遺跡の分布が知られているが、正式な発掘調査が実施された遺跡は少ない。松前町内からは出作宝剣田から前期の有柄式磨製石剣が発見されているが、朝鮮半島からの渡来品とみられるものである。出作の恵依彌二名神社東からは、後期の大型の壺が発見されている。底部付近に土器焼成後、円形穿孔が施されているため祭祀に係るものの可能性がある。横田遺跡の北西約 1.6km の西古泉からも、前期末と後期の遺物が発見されている。

細石核が発見された平松遺跡では、中期の住居址１棟と建造物址３棟、後期の住居址１棟が発見されている。また本遺跡に隣接する伊予市では、太郎丸、片山、中組、北組遺跡などがある。このうち太郎丸、片山遺跡は平成４年に発掘調査が実施され、太郎丸遺跡からは後期末の住居址が２棟、片山遺跡からは住居址３棟、後期の土器溜まり２基と土坑が若干発見されている。富田池から中組一帯には後期の遺跡が、北組には前期前半の遺跡の分布が確認されている。本遺跡に東接する地域は、第一次調査によって小河川に伴う後期末の祭祀遺跡が発見されているが、住居址等の遺構は認められなかった。しかし、試掘調査の結果、前期初頭の良好な遺物が多量に発見されているため、周辺に同時代の集落が展開していた可能性は高い。

平松遺跡から本遺跡並びに片山、太郎丸、中組、北組遺跡へと続く遺跡群は、古期扇状地の

扇端部に展開しており、扇端の湧水が集落成立の重要条件であったようである。遺跡周辺の扇状地の扇端に沿うように分布する遺跡群は、前期と後期が中心であり、中期のものはその割合が少ない。中期の遺跡としては、伊予市の上三谷遺跡がある。これは欠水地帯である古期扇状地上に分布している。さらに大谷川が松山平野に出る左岸の三谷神社東の山頂には中期の高地性集落が分布している。同じ中期の高地性集落でも、標高 400m の山頂に立地する行道山遺跡に比較すると一段低位の高地性遺跡である。

4　古墳時代

この時代になると、松山平野の南西部丘陵上には、東から猿ヶ谷、上三谷、十合の各古墳群が分布している。これらの古墳群の大半は横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、中には箱形石棺を内部主体とする円墳もある。松前町は、標高の最も高い徳丸東組でさえ 21 mで、町内全域が氾濫原ないし三角州であり、現在のところ古墳は 1 基も発見されていない。本遺跡に最も近い古墳としては、東南 1.2 kmに伊予市上三谷古墳群が分布している。上三谷古墳群は 6 世紀後半から 7 世紀前半の後期古墳であり、そのなかには 6 世紀末の前方後円墳である遊塚古墳や、7 世紀初頭の方墳である塩塚古墳、全長 30 mの客池西の前方後円墳があり、西接する嶺昌寺周辺の畑から京都椿井大塚古墳から出土した三角縁神獣鏡と同笵の鏡が二面出土している。沖積平野に分布する古墳は、前述の上三谷古墳群があるが、これ以外には本遺跡南約 1km の埋積谷上の低湿地中に、二つ塚やケリヤ古墳が分布している。二つ塚やケリヤ古墳は標高 19 mに分布しているので、松前町内でも同様の地形で将来古墳が発見される可能性がある。

この時代の生活遺跡としては、本遺跡北東に所在する出作遺跡がある。出作遺跡は 5 世紀前半から後半にかけての祭祀を中心とする大規模な遺跡であり、夥しい土師器と須恵器、滑石製模造品、祭祀用とみられるミニチュア鉄器、鉄などが発見されている。遺跡の性格は農耕儀礼に係る水霊信仰の場であるとともに、それらに従事した人々の生活の場であったようである。特に滑石の剥片の出土は、この地で加工されたことを表している。本遺跡の分布する横田から 1816 年 (文化 13) に農民が井戸掘り中に、長さ 12.9cm の滑石製の子持勾玉を発見している。現在はその場所が横田のどこであったのかは明らかではない。

本遺跡の南西部には調査された伊予市北替地遺跡があり、古墳時代の竪穴式住居址や掘立柱建造物址、土坑墓などが発見されている。太郎丸遺跡からは溝状遺構に伴う後期初頭の須恵器群が発見されている。5 世紀においては松前町神崎、横田地区からも遺物が発見されている。

5　歴史時代

歴史時代の遺跡としては、平松遺跡がある。平松遺跡では明確な遺構を検出するには至って

いないが、須恵器の円面硯や石製分銅・各種須恵器・土師器から、地方官衙ないし寺院が周辺地域に存在した可能性が指摘されている。隣接する北替地、太郎丸両遺跡からも、7世紀から8世紀にかけての遺物が発見されているので、この時期の集落が形成されていた可能性がある。

7世紀後半から8世紀前半にかけての、この他の遺跡としては、伊予市かわらが鼻を中心とする周辺に17基の瓦窯址があるが、南組窯址は5世紀後半の、三秋窯址は6世紀末から7世紀初頭の須恵器専用窯址である。さらに伊予市上吾川には白鳳から天平時代にかけての上吾川古泉廃寺があり、また伊予市八倉でも天平時代から平安時代初期の篠原廃寺跡が発見されて、調査が行われた。これら以外でも数箇所で古代の布目瓦が発見されているので、将来古代寺院等が発見される可能性がある。

式内社としては、松前町徳丸の高忍日売神社、伊予市宮下伊曽能神社、伊予市上野伊予神社の三社が、大井出川、長尾谷川上流周辺の狭い範囲に集中している。このことから奈良時代後半から平安時代前半の松山平野南部の政治、文化の中心地は、この範囲か、隣接する地域に所在したと推定され、「伊予二名島」「伊豫国」「伊豫郡」の名は、この地から発生したとみることもでき、県内でも最も古くから文化が開花した地域の一つであるといわれている。

参考文献

愛媛県 1986『愛媛県史　資料編　考古』

杉本一正 1992『横田遺跡』松前町教育委員会

相田則美 1993『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会

長井数秋 1996『横田遺跡Ⅱ区』松前町教育委員会

西川真美他 2005 『願連寺泉遺跡２次・願連寺元泉遺跡・願連寺建ヶ内遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

長井数秋 2005 『行道山遺跡』伊予市教育委員会

Ⅲ　調査の概要

試掘調査

試掘調査結果

本遺跡の行政位置は伊予郡松前町大字横田１番地で絶対位置は、北緯 33°　46′　21″、東経 132°　43′　51″の交差する付近の溜池 (楠池) 中である。

楠池は面積 21076 ㎡で、この周囲に堤高 5.8m、堤長 487m の堤防が構築されている。南側堤防長約 100m の内側法面下と北側堤防長約 95m の内側法面下に、東西長約 200cm、南北幅 100cm の試掘溝 (以下「トレンチ」) をそれぞれ３ヶ所、東側堤防長約 80m の内側法面と西側堤防長約 80m の内側法面下に南北長 200cm、東西幅 100cm のトレンチをそれぞれ２ヶ所設定してバックフォーにより掘削し調査を行った。

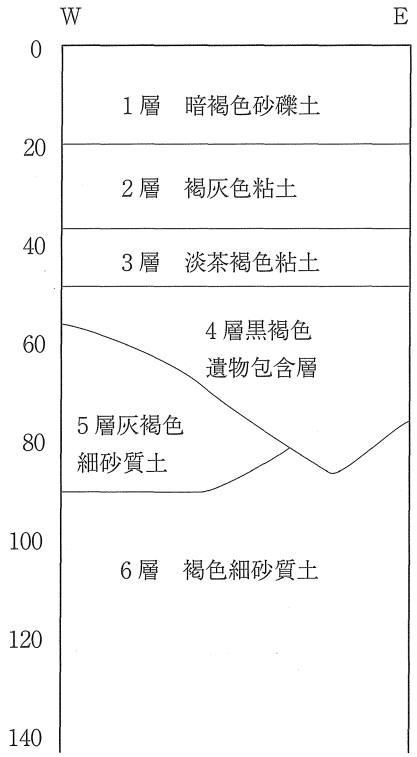
トレンチでは掘削中並びに掘削後において、各地層中に遺物や遺構、遺物包含層の有無を観察し、確認した後、地層断面の写真撮影と堆積層序図をそれぞれ作成した。

試掘調査の結果、４号トレンチ (以下「T-4」) の第４層において、弥生時代のものと思われる土器片２点と溝状遺構が確認された。

本　調　査

基本層序

本調査区の基本層序は北側の壁面で観察した。第１層は堤防の崩落土である。第２層は粘土層で薄く堆積する。第３層と第５層は安定した堆積層で、その間に第４層の明黄褐色粘土層が時折、堆積する。



図－２　基本層序

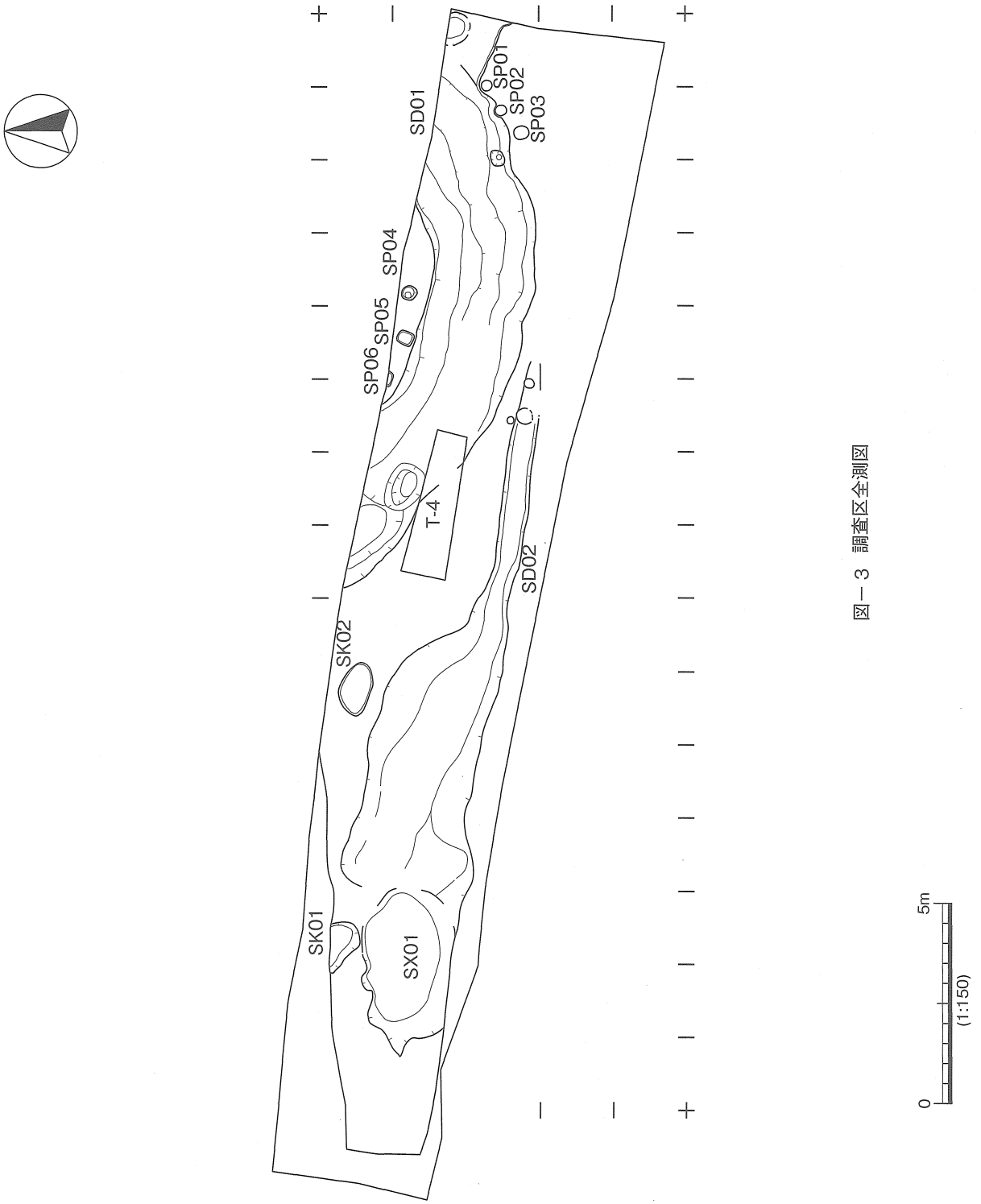
調査の結果

試掘調査の結果を受けて、平成 19 年２月より発掘調査が行われた。調査は、調査区内にトレンチを設定し、土層の堆積状況を把握した後、表土層を機械力で除去して行われた。続いて人力で精査を行い、遺構・遺物の検出を行った。検出

した遺構に対しては平・断面図の測量・写真撮影等の観察・記録を行った。出土した遺物は、遺構・層位ごとに取り上げ、必要に応じて、出土状況図を作成した。なお測量にあたっては調査区に公共座標を設定し、5m 単位のグリットを用いて実施した。

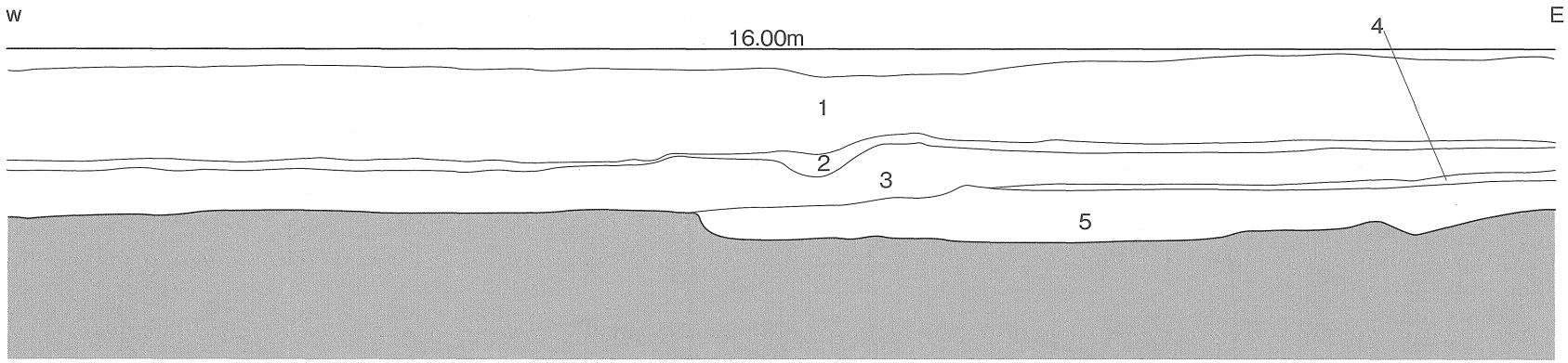
調査の結果、溝状遺構 2 基 (SD01・02) と土坑 2 基 (SK01・SK02)、性格不明遺構 1 基 (SX01)、小穴 6 穴 (SP01・02・03・04・05・06) を検出した。

また縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、石器等の遺物が出土した。

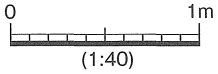


図－3 調査区全測図

図－４　基本層序北壁



層名	色調	Munsell	土質	備考
1	灰白色	5Y7/1	礫	
2	にぶい黄橙色	10YR7/4	粘土	
3	灰白色	2.5Y7/1		
4	明黄褐色	10YR7/6	粘土	
5	暗褐色	7.5YR3/3		



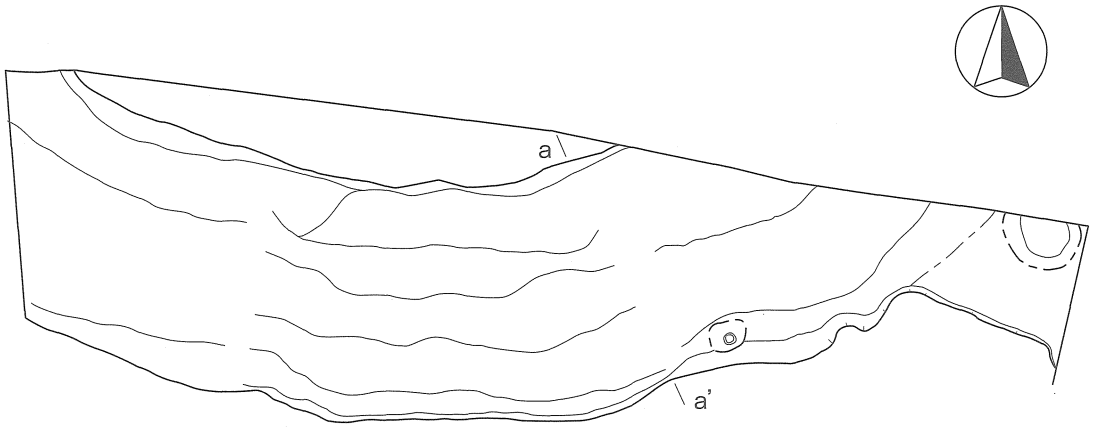
Ⅳ　遺構と遺物

1　溝状遺構

SD01(図－５～８)

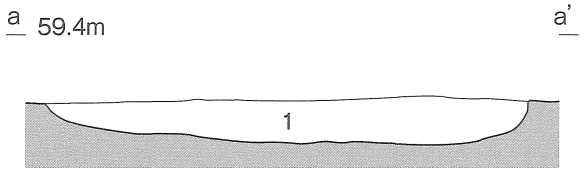
遺構

SD01は調査区中央部の北から、南東方向に大きく湾曲しながら北へ延びる。そのほとんどが調査区外であり、詳細は不明である。埋土は黒褐色礫混土である。またその堆積状況および出土遺物の状況から、流れはほとんどなかったものと考えられる。遺構の規模は、残存長2700cm、幅50cm、深さ20cm～48cmを測る。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等が出土している。縄文時代の遺物がまとまって出土しており、遺物はローリングをほとんど受けていないため、縄文時代後期には存在していた遺構であると思われる。また遺構の両端より同一固体と思われる須恵器の甕が出土したが、胴部のみの破片であったため、図化するには至らなかった。



図－５　SD01　平面図

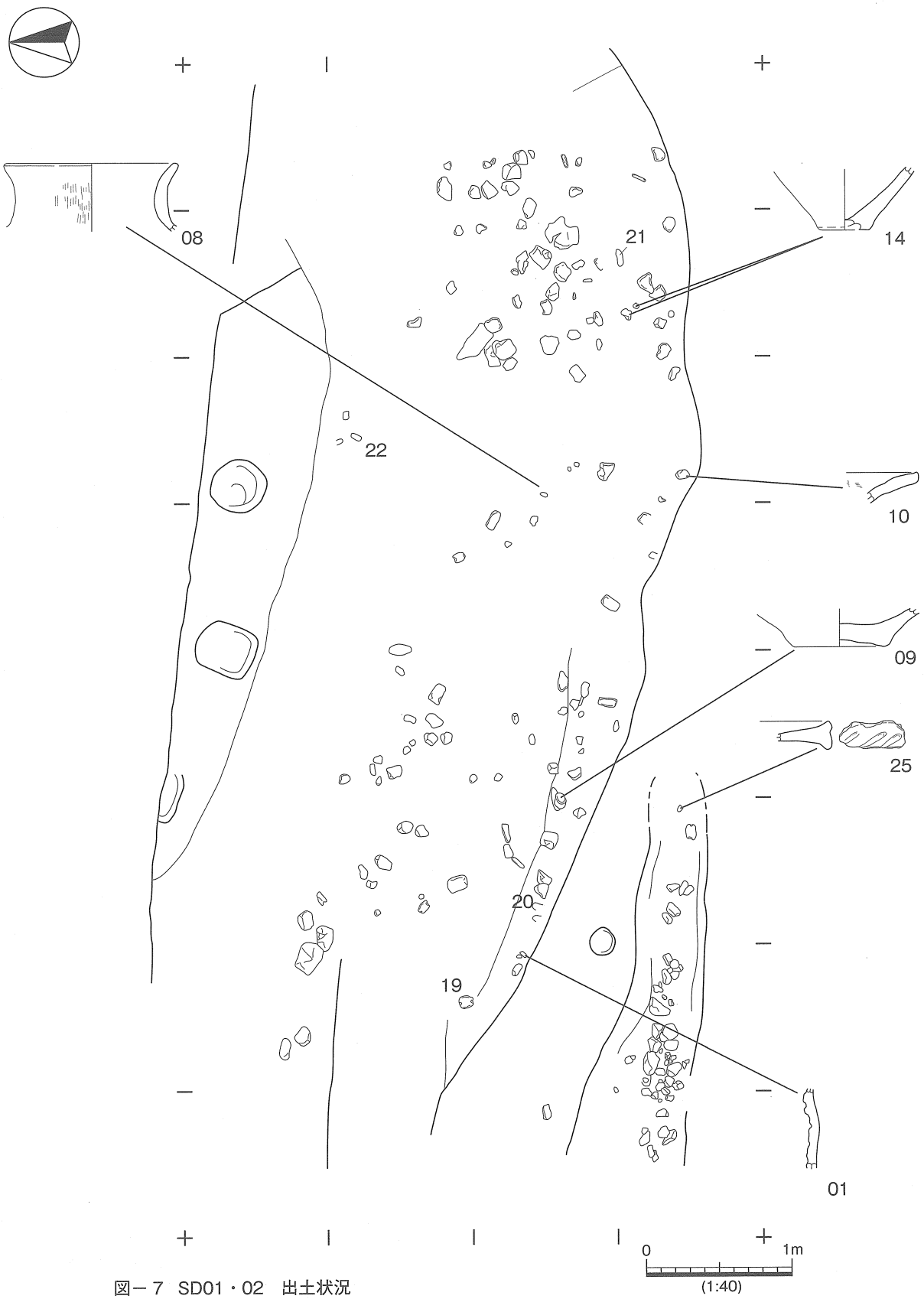
0　2m
(1:80)



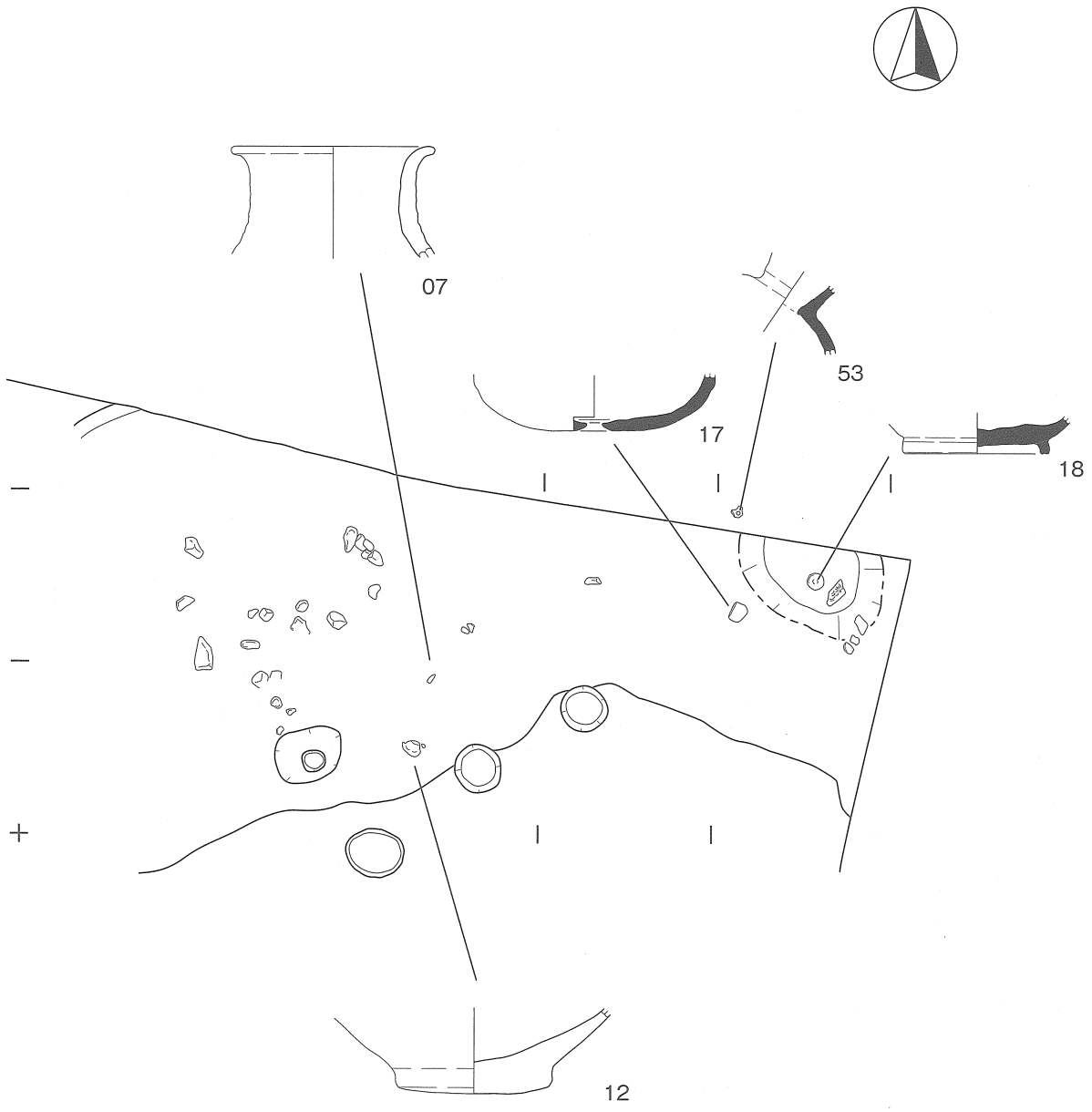
図－６　SD01　南北ベルト断面図

0　1m
(1:40)

層名	色　調	Munsell	土質	備考
1	黒　褐　色	7.5YR2/2	礫混り	



図－7　SD01・02　出土状況



図－８　SD01　東側出土状況

0　1m
(1:40)

遺物

01～06(図－9)は縄文土器である。01は波状口縁をもつ深鉢である。沈線により文様を施す。縄文時代後期のものと思われる。02は鉢の口縁部である。口縁は波状を呈する。縄文時代後期のものと思われる。03は鉢の口縁部である。口縁端部を欠損するが、波状口縁をもつと思われる。沈線を施す。縄文時代後期のものと思われる。04は鉢の胴部である。05は鉢の口縁部である。口縁端部付近に沈線を施す。縄文時代後期のものと思われる。06は鉢の胴部である。摩滅が著しく調整等は不明である。

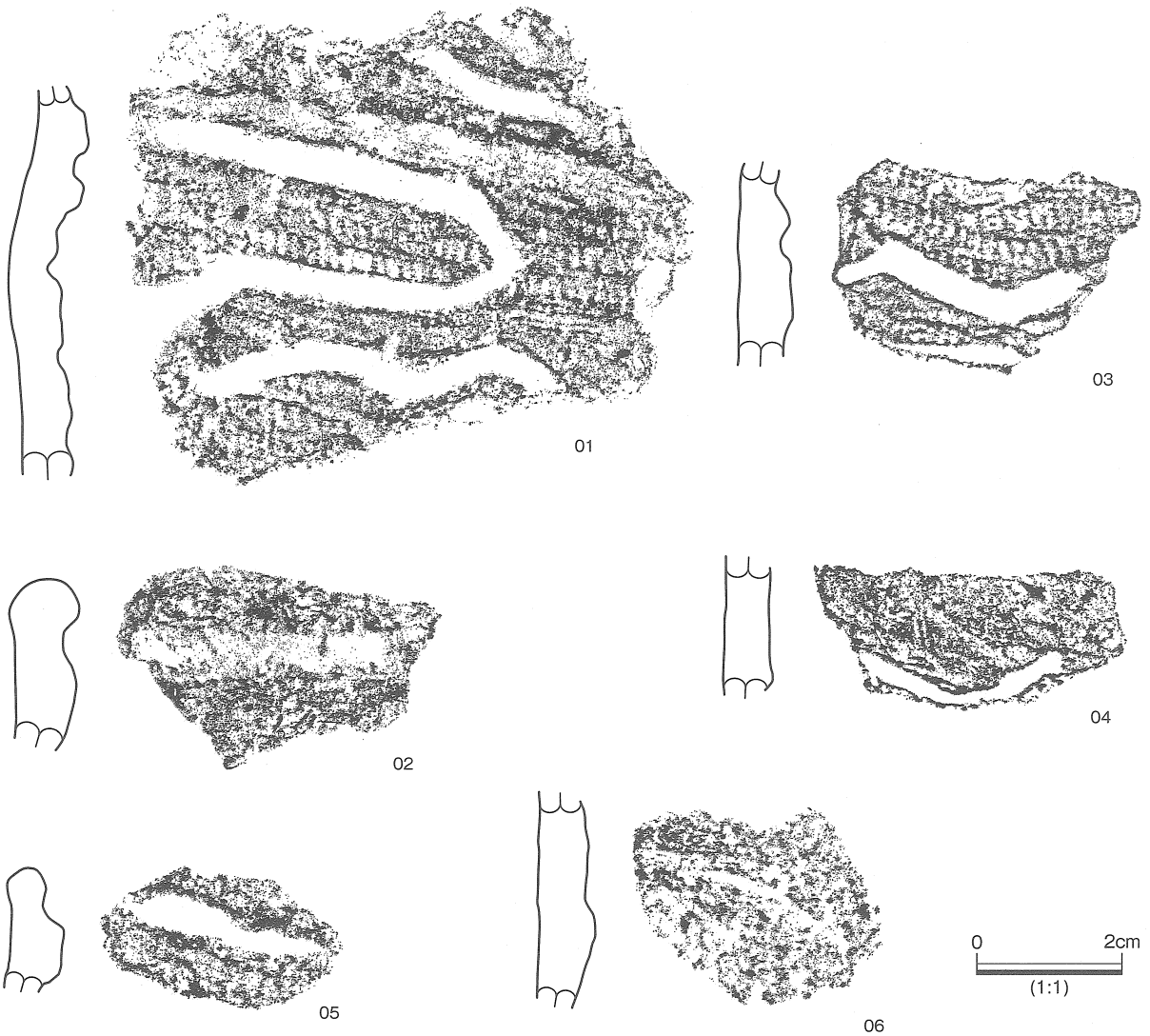
07～11(図－10)は弥生土器である。07、08は広口壺の口縁部である。07は頸部が直立し、口縁部は短く外反する。磨耗が著しく調整等は不明である。08は頸部がやや太く、口縁部は緩やかに外反する。外面にハケ調整が施され、内面は口縁部にナデ調整がみられるが、磨耗が激しくその他の調整は不明である。09は壺の底部である。やや上げ底である。外面にナデ調整がみられるが、磨耗が著しい上、焼成も不良であり、その他の調整は不明である。10は甕の口縁部である。口縁が大きく外反する。内面に僅かにハケが残る。11は鉢の口縁部である。端部は欠損しているが折り曲げ口縁を持つものと思われる。内外面とも磨耗が著しく、調整等は不明である。

12～14(図－11)は土師器である。12は壺の底部である。平底でくびれを持つ。内外面とも磨耗が著しい。13、14は鉢の底部である。13は内外面ともにナデ調整がみられる。14は磨耗が著しく調整は不明である。

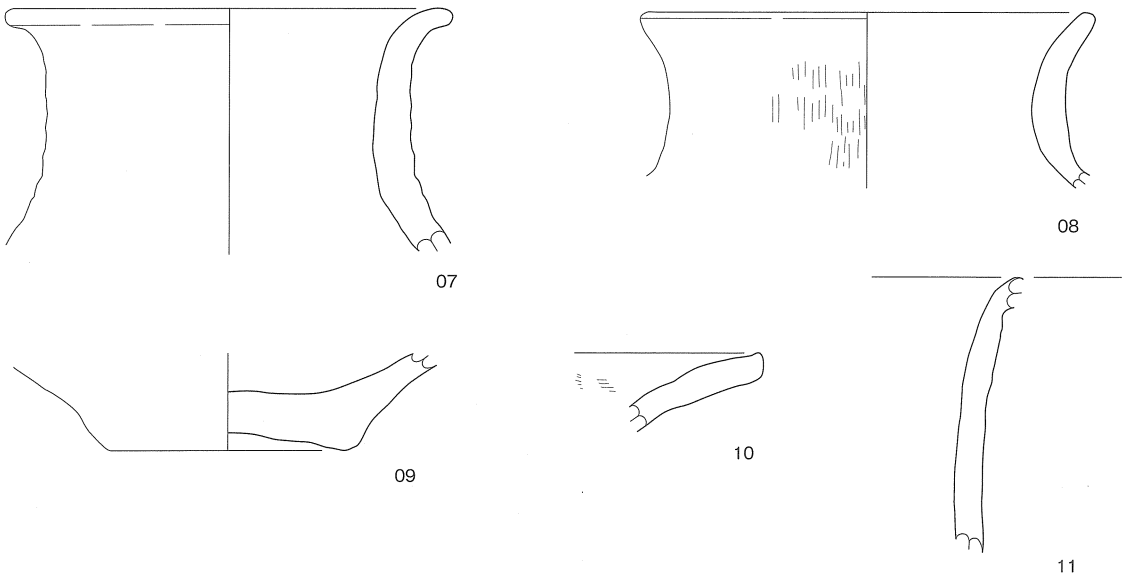
15～18(図－12)は須恵器である。15は壺の口縁部である。内外面とも回転ナデ調整が施される。16は杯蓋である。口縁端部内面にくぼみをもち、外面に明確な稜をもつものである。口縁部は直線的に外傾する。外面にオリーブ灰色の自然釉がまだらにかかる。内外面とも回転ナデ調整が施される。焼成はやや不良である。17、18は杯である。17は底部に焼成後、穿孔が施される。焼成は不良である。内外面とも回転ナデ調整が施される。18は胎土に気泡が混入したためか、見込みに凹凸がみとめられる。底部には貼付により輪高台が施される。内外面とも回転ナデ調整である。

19～24(図－13・14)は石器である。19は扁平な緑泥片岩製の石包丁未製品である。全周を粗く加工した後、刃部を作成する。左側面中央より下の部分に穿孔を施そうとした痕跡が残る。裏面は中央よりやや上部および下部に穿孔を施そうとした痕跡が残る。法量は長さ12.0cm、幅4.9cm、厚さ0.9cm、重さ69.14gである。20は緑泥片岩製の石包丁未製品である。刃部の一部が欠損する。裏面側から全周に調整を加えている。全体を刃部と平行するように研磨を施し、表面の中央付近に途中まで、穿孔を施そうとした痕跡が残る。法量は長さ5.1cm、幅10.0cm、厚さ0.9cm、重さ56.48gである。21は緑泥片岩製の打製石斧である。全周を表裏両面から加

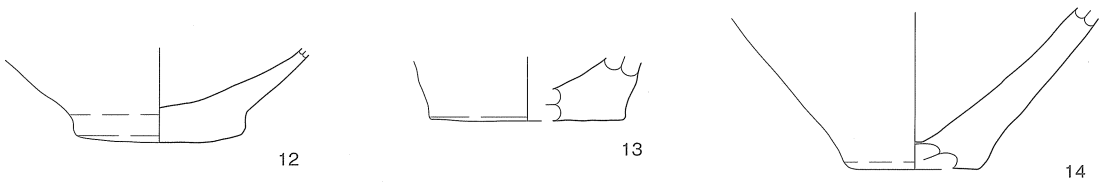
工する。基部付近の加工は細かく行われる。刃部と思われる下部も同様に加工される。表面に自然面が残る。裏面には整形以前の大きな剥離痕を残す。法量は長さ 15.1cm、幅 5.5cm、厚さ 1.6cm、重さ 145.69g である。22・23 は石錘である。22 は円礫の上下両端に抉りを施す。裏面から調整を行った後、表面より調整を施す。法量は長さ 8.8cm、幅 9.2cm、厚さ 2.0cm、重さ 310.79g である。23 は緑泥片岩を素材とする。扁平な円礫の上下両端に抉りを施す。裏面から調整を行った後、表面より調整を施し、抉りを形成する。表面左縁側中央部に紐ずれと思われる痕跡を残す。法量は長さ 10.6cm、幅 7.7cm、厚さ 1.9cm、重さ 238.98g である。21 から 23 はいずれも縄文時代後期の石器であり、ともに出土した縄文土器と同時代のものと思われる。24 は砂岩製の砥石である。上下両端は欠損する。表裏両面を使用しているが、風化が著しいため、研磨方向は不明である。右側面には研磨以前のものと思われる鑿跡がみられる。法量は残存値で長さ 5.9cm、幅 3.7cm、厚さ 2.4cm、重さ 86.53g である。



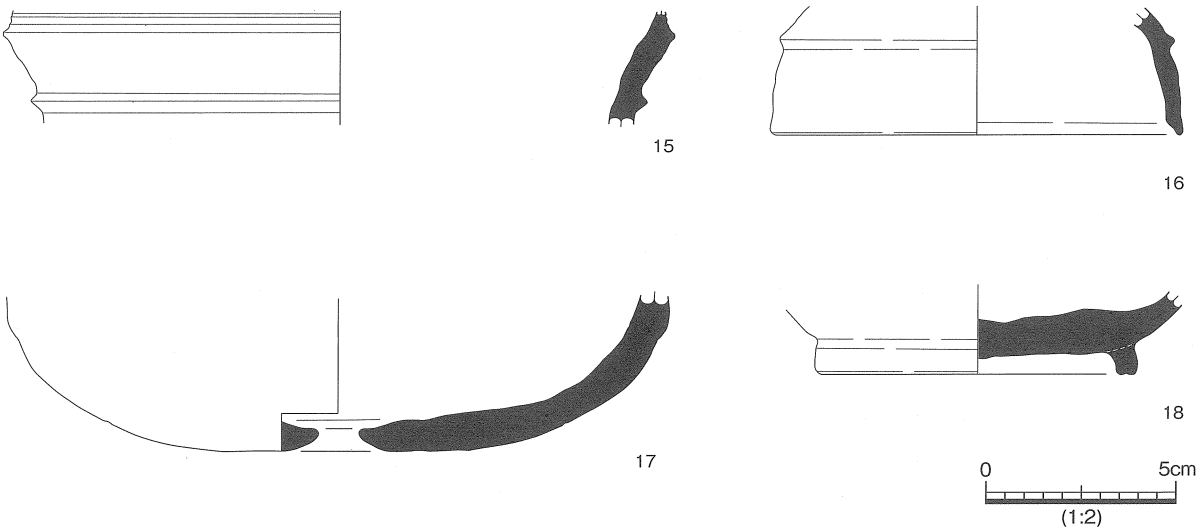
図－9



図－10

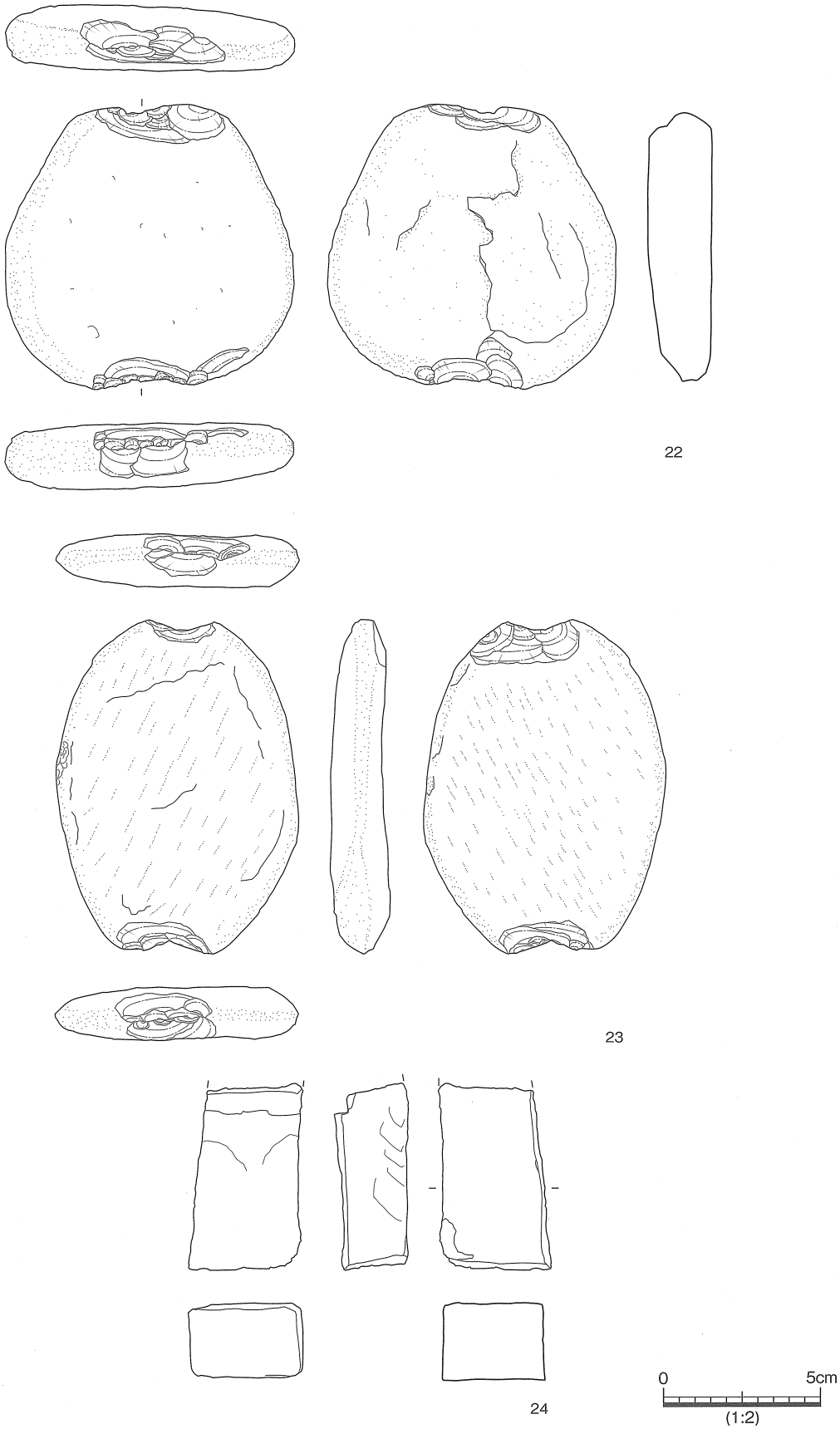


図－11



図－12

図－13

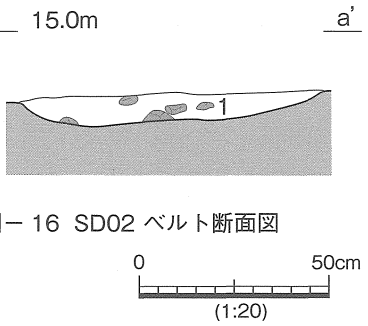


図－14

SD02(図－15・16)

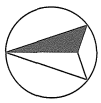
遺構

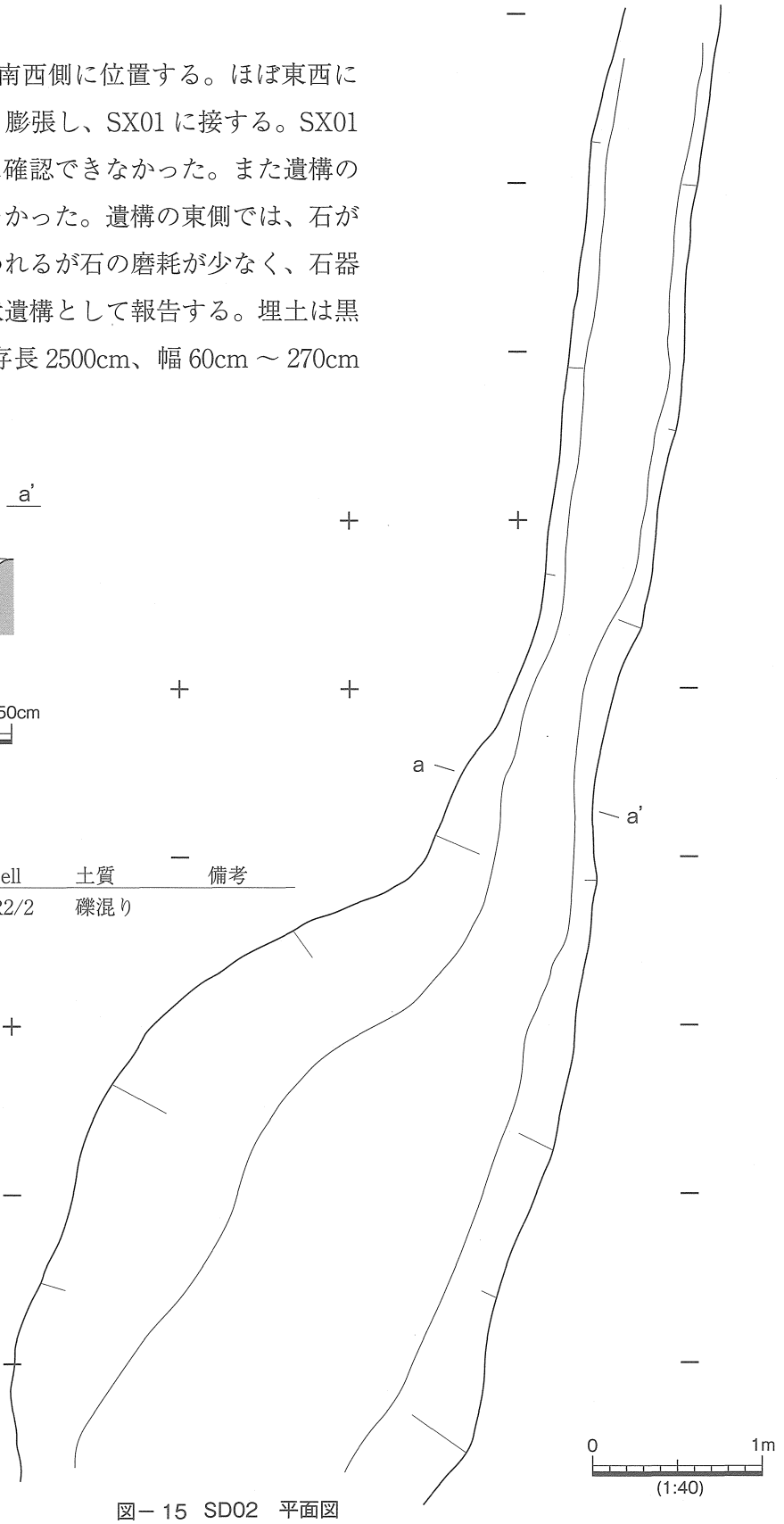
SD02は東より調査区の南西側に位置する。ほぼ東西に直線状に走るが途中大きく膨張し、SX01に接する。SX01との切り合い関係は明確に確認できなかった。また遺構の東端も不明瞭で確認できなかった。遺構の東側では、石が多く含まれ、流路とも思われるが石の磨耗が少なく、石器が多く含まれるため、溝状遺構として報告する。埋土は黒褐色土である。規模は残存長2500cm、幅60cm～270cm



図－16 SD02 ベルト断面図

層名	色調	Munsell	土質	備考
1	黒褐色	7.5YR2/2	礫混り	





図－15 SD02 平面図

深さ 7cm ～ 20cm を測る。

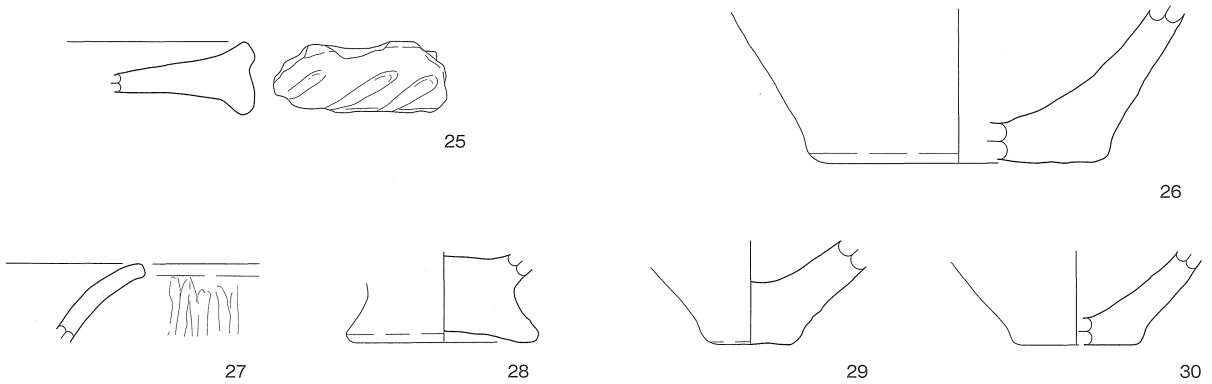
遺物

25 ～ 30(図－ 17) は弥生土器である。25 は広口壺の口縁部である。口縁部は大きく外傾したのち、上下に肥厚する。口縁端部外面にくぼみをもち、ヘラ状工具による斜行文が施される。内外面にナデ調整が施される。26 は壺の底部である。平底である。磨耗が激しく調整等は不明である。27 は甕の口縁部である。口縁は緩やかに外反し、内外面ともにミガキ調整が施される。内面には一部ナデ調整も残る。28 ～ 30 は甕の底部である。28 は底部にくびれを持ち、やや上げ底である。外面にナデ調整が残る。内面は磨耗のため調整は不明である。29、30 は平底である。どちらも磨耗が著しいが、内外面にナデ調整が僅かに残る。

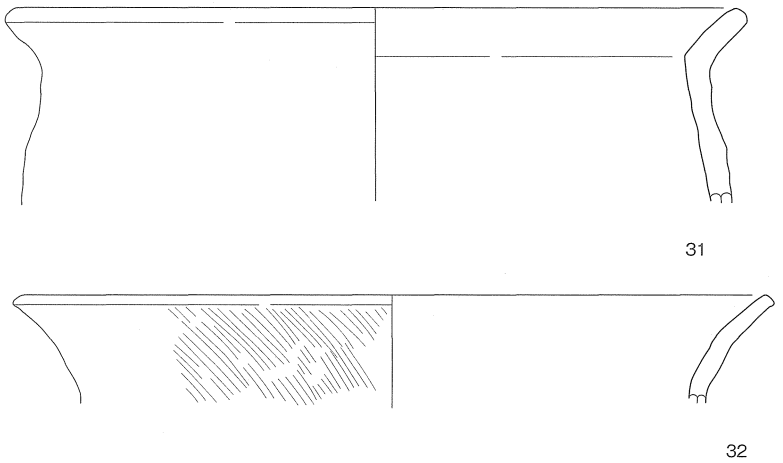
31、32(図－ 18) は土師器の甕である。31 は胴部がやや内傾しながら立ち上がり、口縁は短く外傾する。磨耗のため調整は不明である。32 は口縁部がくの字に外反する形態をもつものと思われる。口縁端部が僅かに細くなる。外面にハケ調整を施す。口縁部内面にナデ調整が残る。

33 ～ 35(図－ 19) は須恵器である。33、34 は壺である。33 は口縁部が外反し、端部は上方にやや拡張する。調整は内外面とも回転ナデ調整で、外面にカキメを施す。34 は口縁部がやや外反し、端部は上方に小さく直立し、ややくぼむ面を持つ。内外面とも回転ナデ調整が施される。35 は杯の底部である。外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整である。

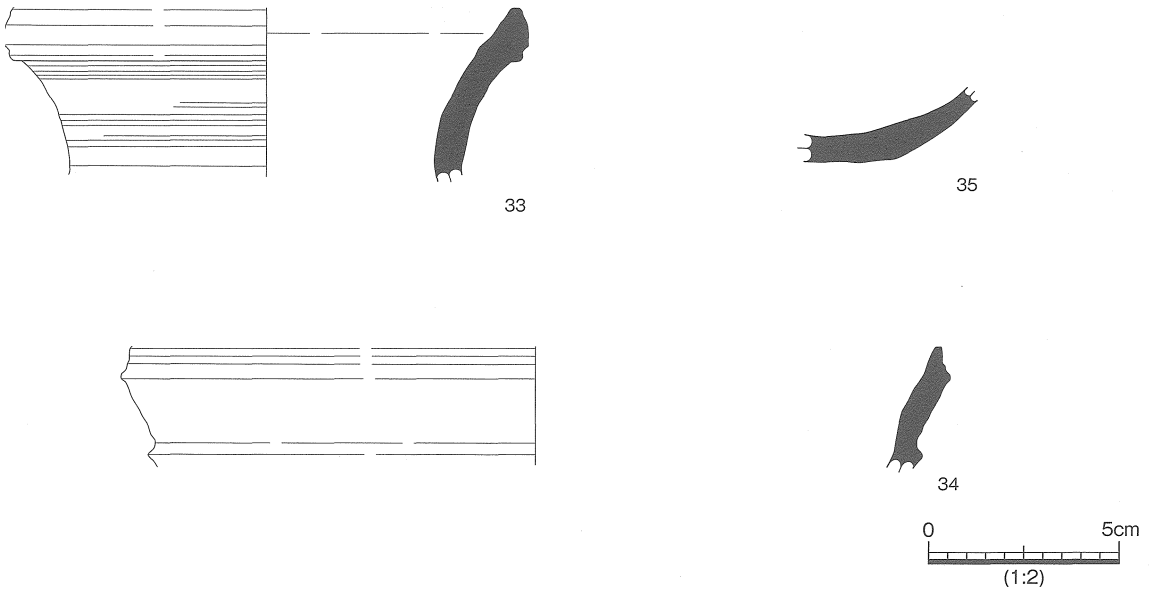
36 ～ 41(図－ 20・21) は石器である。36 は磨製石斧である。刃部のみが残存する。風化が著しく、磨痕が確認しづらいが、表面の刃部右側に刃部と平行するもの、左縁側に刃部と直行する研磨痕が残る。裏面では刃部に直行する研磨痕が残る。法量は残存値で長さ 7.3cm、幅 5.6cm、厚さ 2.0cm、重さ 126.01g である。37 は扁平な緑泥片岩製の石錘である。上下両端に押圧剥離による抉りを形成する。左右両側面には、敲打による調整が僅かに認められる。法量は長さ 10.5cm、幅 6.4cm、厚さ 1.6cm、重さ 194.77 g である。38 は砂岩製の磨石である。全体を入念に磨いているが、風化が著しい。二次的な作用による亀裂が複数認められる。表面中央、裏面の上下部に敲打による凹みが認められる。法量は長さ 10.2cm、幅 8.4cm、厚さ 3.6cm、重さ 404.44g である。39 は赤色頁岩製の磨石である。表面全体を磨き、裏面は研磨によって面取りを行った後、敲打されている。法量は長さ 7.6cm、幅 9.1cm、厚さ 2.3cm、重さ 228.52g である。40 は両面加工石器である。表面に大きく自然面を残し、上部になるにつれ調整が発達していき、特に左縁側で顕著である。裏面では、調整はほぼ全体に施され、左右の縁側中央部が顕著である。中央部に石理面を残す。下部は表裏両面からの剥離により最も薄く形成される。法量は長さ 10.2cm、幅 7.8cm、厚さ 3.3cm、重さ 274.29g である。41 は不明石器である。扁平な礫の全周を調整し、特に先端部は入念な加工が施され、尖頭状を呈す。左縁側中央付近には敲打痕が認められる。石材は緑泥片岩である。法量は長さ 13.0cm、幅 8.8cm、厚さ 1.9cm、重さ 309.07g である。



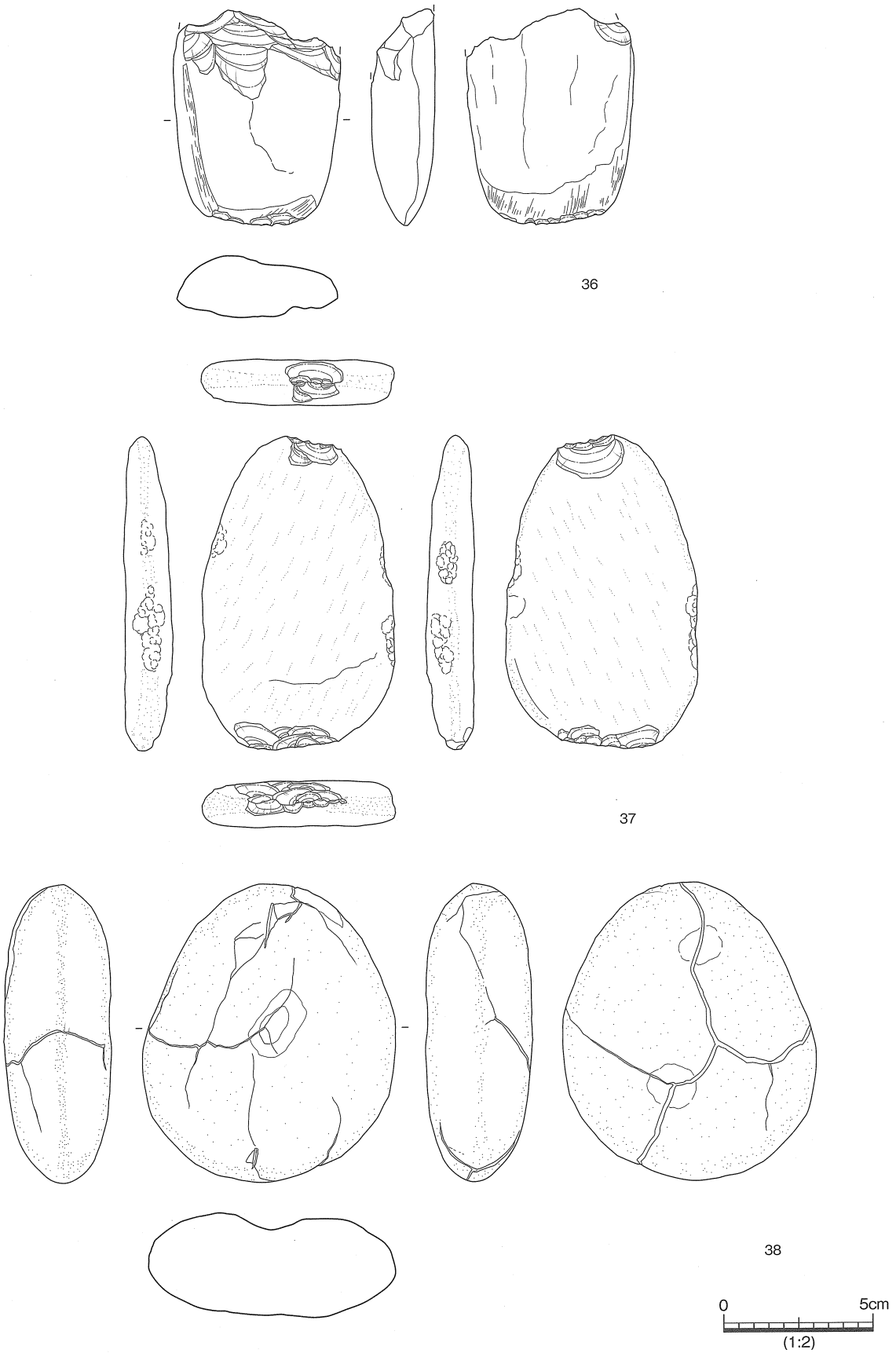
図－１７



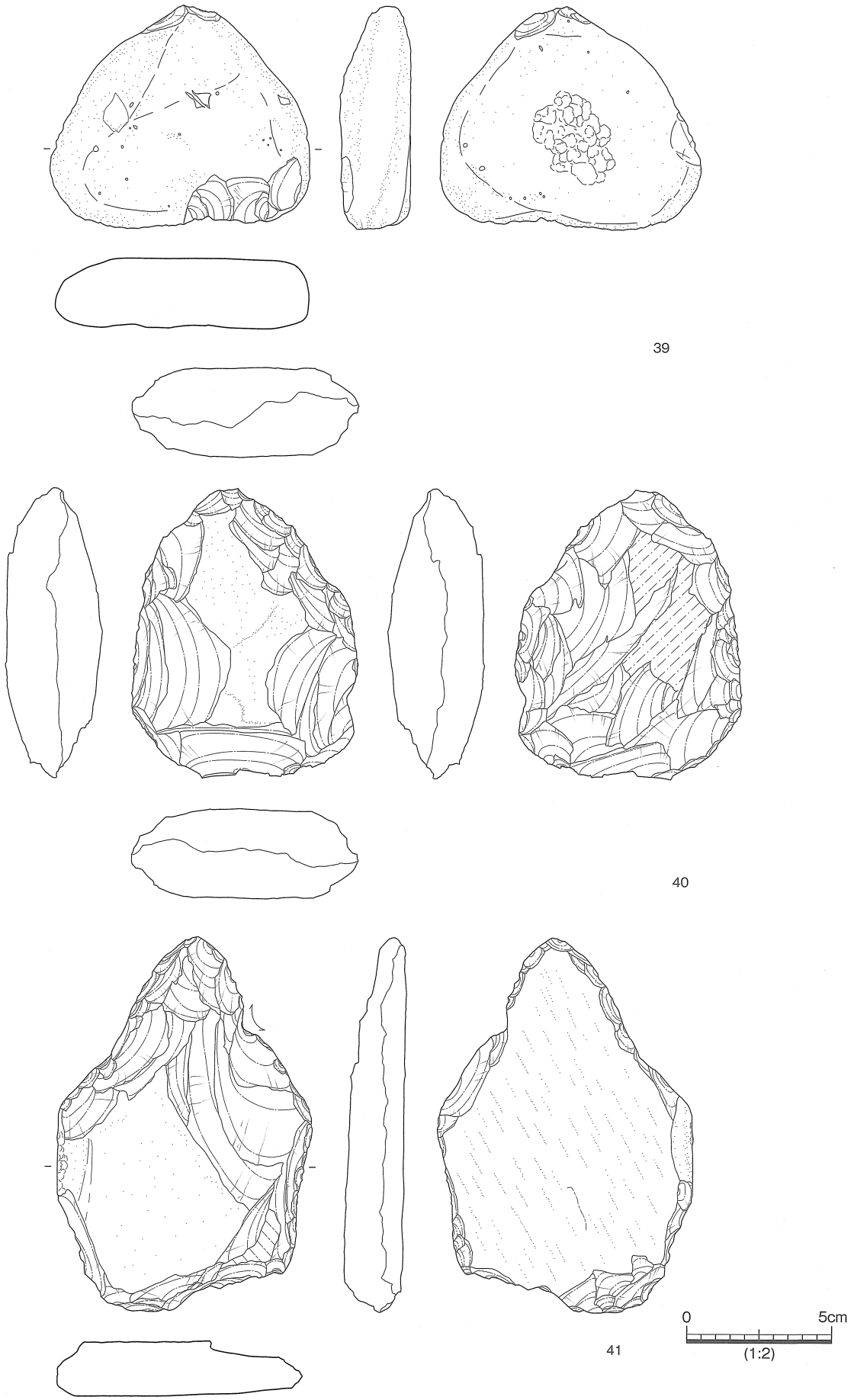
図－１８



図－１９



図－２０



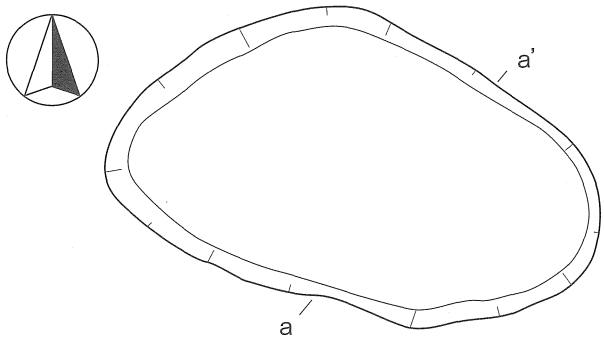
図－２１

2　土坑

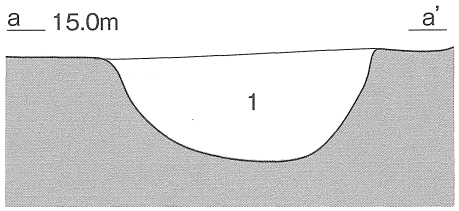
SK01(図－22・23)

遺構

SK01は調査区のほぼ中央北よりに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長径131cm、幅72cm、深さ32cmを測り、埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。



図－22 SK01　平面図　0　50cm (1:20)



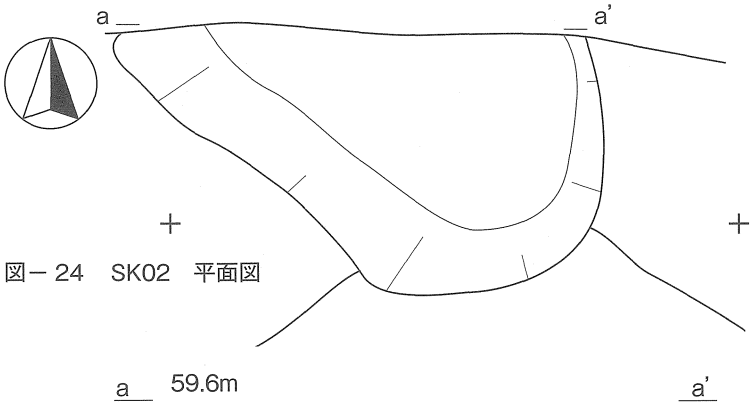
図－23 SK01　断面図　0　50cm (1:20)

層名	色　調	Munsell
1	黒　褐　色	7.5YR2/2

SK02(図－24・25)

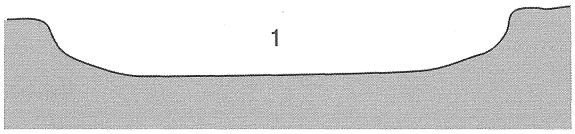
遺構

SK02は調査区の西側に位置し、北側が調査区外に延びる。平面形は不整形で、規模は残存長径119cm、幅71cm、深さ25cmを測る。埋土は明赤褐色土である。



図－24　SK02　平面図　0　50cm (1:20)

層名	色 調	Munsell
1	明赤褐色	5YR5/8

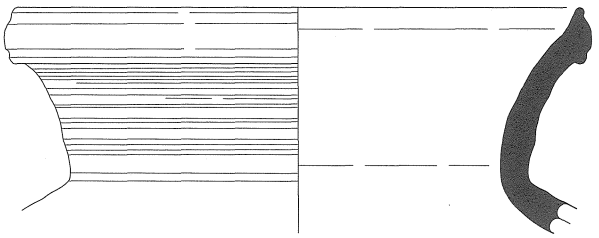


0　50cm (1:20)

図－25　SK02　断面図

遺物

42(図－26)は須恵器の壺である。口縁部はやや外反し端部は上下に緩やかに拡張し、くぼむ面を持つ。内外面とも回転ナデ調整のち、外面にカキメを施す。



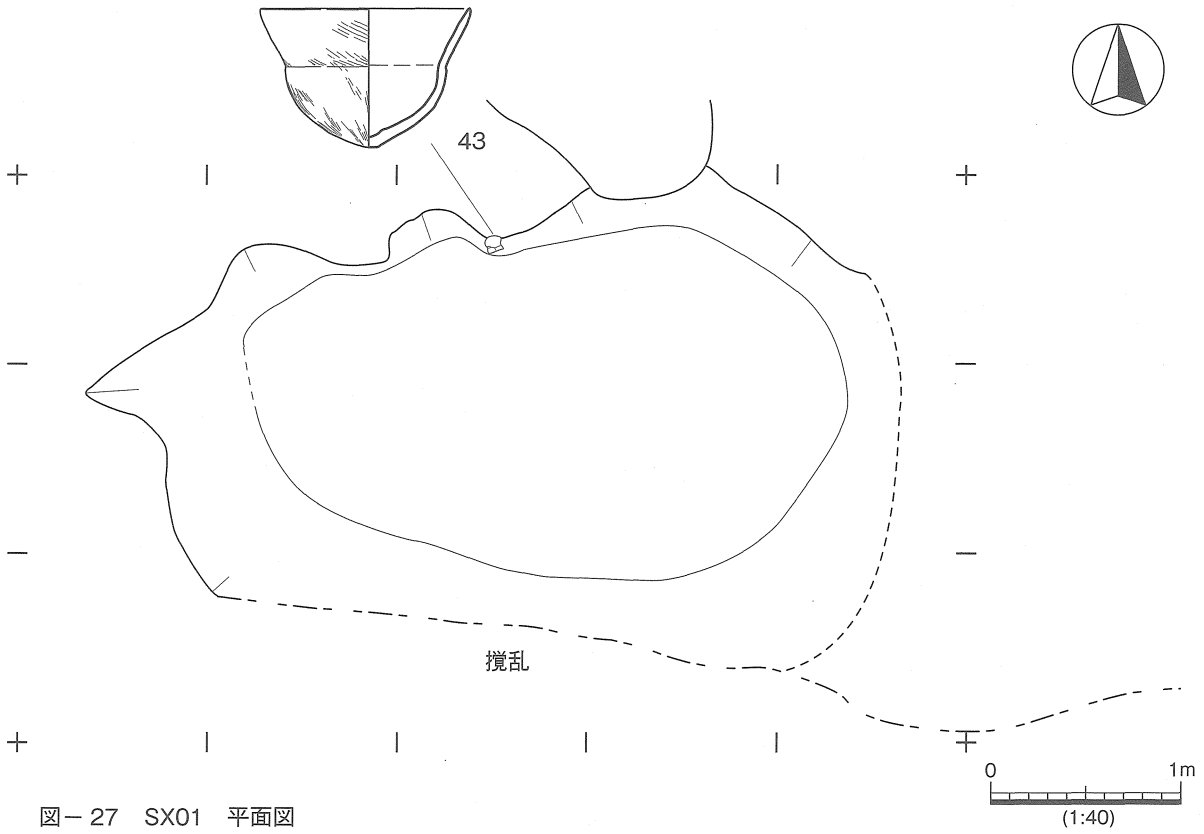
図－26

3　性格不明遺構

SX01(図－27)

遺構

SX01は調査区の西側に位置する。SD02と接し、その切り合いは不明である。また南側が撹乱を受けている。平面形は不整形を呈し、残存長径400cm、幅200cm、深さ30cmを測る。
出土遺物は古式土師器、石鏃であるが、遺構の時期は不明である。

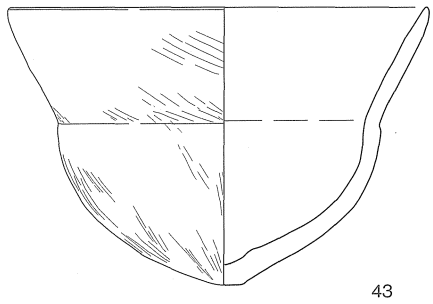


図－27　SX01　平面図

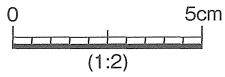
遺物

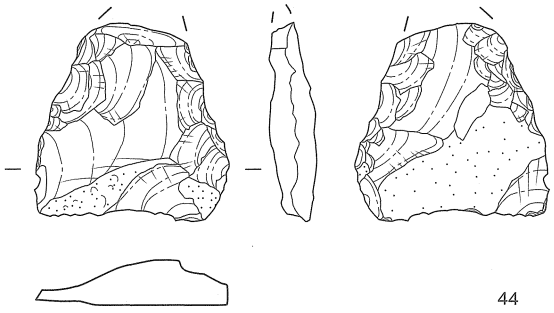
43(図－28)は古式土師器の小型丸底鉢である。口縁がやや外反しながら立ち上がり、端部は細くやや尖る。外面にハケが残るが、磨耗のため、その他の調整は不明である。

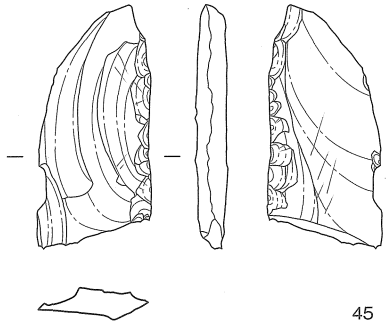
44、45(図－29)は石器である。44は安山岩製の石鏃である。先端部が欠損する。両側面とも押圧剥離による調整が施される。調整に規則性はほとんど認められず、裏面左縁側のみ下部から先端へと調整を施す。脚部の調整も粗く、自然面を残し、1回の加撃しか行われていない。法量は残存値で長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm、重さ4.88gである。45は石鏃未製品である。左縁側に僅かに押圧剥離を施す。剥片の刃部には調整はみられない。不定形剥片を使用している。法量は長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ2.49gである。



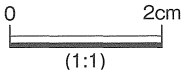
図－28







図－29



4　小穴

SP01(図－30)

遺構

SP01は調査区の東側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長径36cm、幅34cm、深さ8cmを測る。埋土は明褐色土である。遺物は出土していない。

SP02(図－31)

遺構

SP02は調査区の東側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長径26cm、幅26cm、深さ6cmを測る。埋土は明褐色土である。遺物は出土していない。

SP03(図－32)

遺構

SP03は調査区の東側に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長径28cm、幅26cm、深さ4cmを測る。埋土は明褐色土である。遺物は出土していない。

SP04(図－33)

遺構

SP04は調査区の東側北よりに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、途中に段を持つ。規模は長径38cm、幅36cm、深さ20cmを測る。埋土は明褐色土であり、明赤褐色土が混じる。遺物は出土していない。

SP05(図－34)

遺構

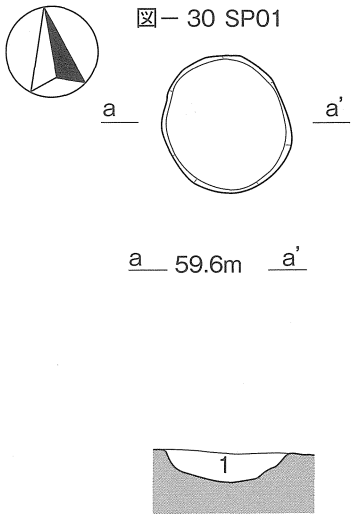
SP05は調査区の東側北よりに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長径41、幅32cm、深さ28cmを測る。埋土は明褐色土であり、明赤褐色土が混じる。遺物は出土していない。

SP06(図－35)

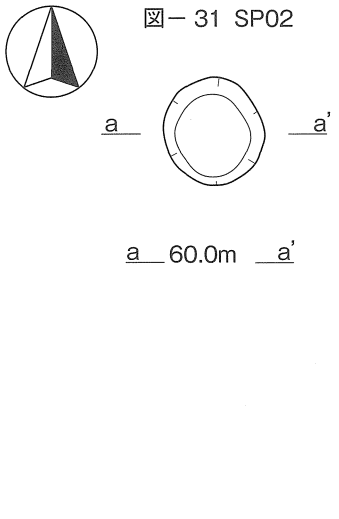
遺構

SP06は調査区の東側北よりに位置し、遺構の北側が調査区外に延びる。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。規模は残存長径40cm、幅14cm、深さ16cmを測る。埋土は明褐色土である。遺物は出土していない。

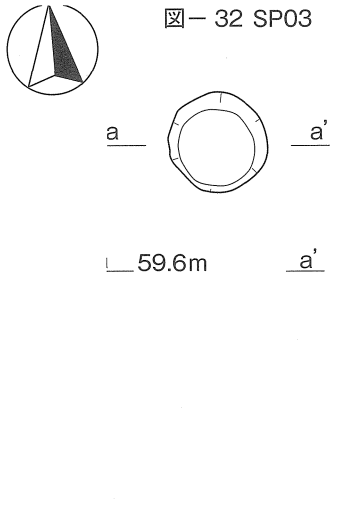
図－ 30 SP01



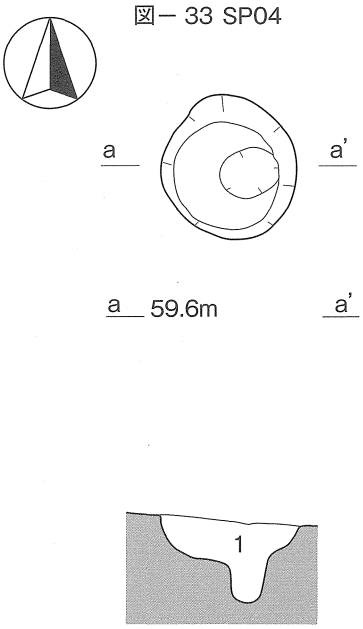
図－ 31 SP02



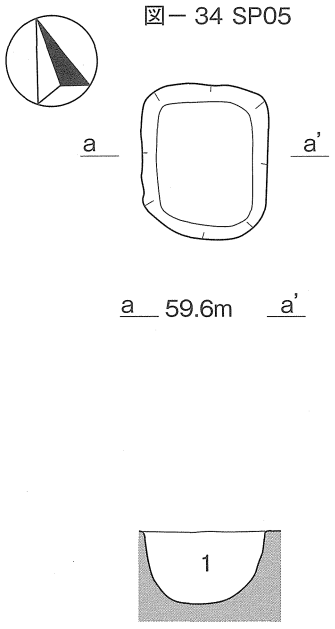
図－ 32 SP03



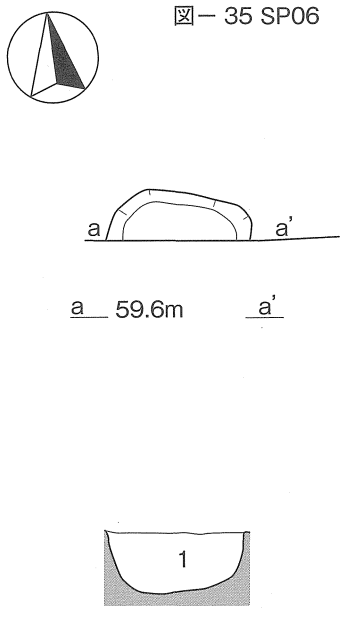
図－ 33 SP04



図－ 34 SP05



図－ 35 SP06



0 50cm
(1:20)

層名	色調	Munsell	土質	備考
1	明褐色	7.5YR5/2		

5　遺構外出土の遺物

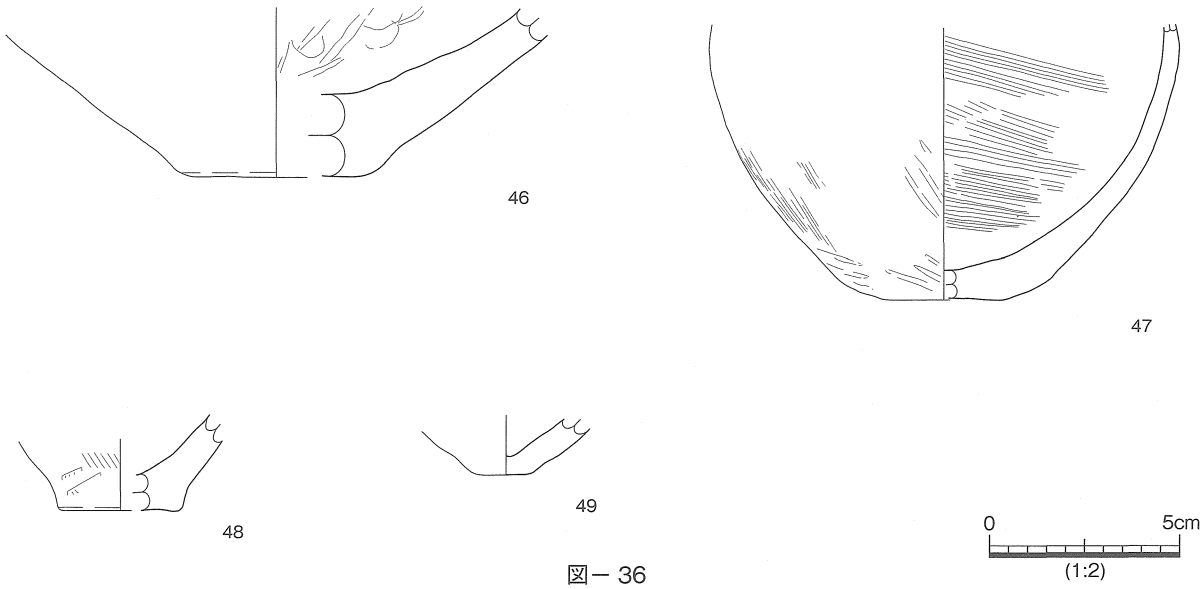
遺物

46 ～ 49(図－ 36) は弥生土器である。46 は大型壺の底部である。外面は底部付近にナデ調整が残るが磨耗のため、他の調整は不明である。内面にミガキ調整、指押さえが見られる。47 は小型広口短頸壺の胴部から底部であると思われる。外面はタタキのちハケ調整、内面はハケ調整が施される。胴部は丸味を帯びる。48、49 は甕の底部である。48 はやや突出する底部を持つ。外面はナデ調整のちハケ調整、内面はナデ調整が施される。49 は底部が僅かに突出する形態を呈する。磨耗が著しく、内外面とも調整は不明である。

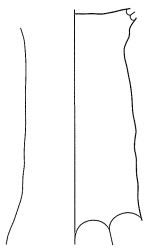
50、51(図－ 37) は土師器である。50 は高杯の脚部である。磨耗しているもののナデ調整が残る。51 は杯である。底部に削り出しにより、輪高台を作り出す。内外面ともにナデ調整が施される。

52、53(図－ 38) は須恵器である。52 は高杯である。内外面とも回転ナデ調整が施される。脚部に杯部を差し込んだ後、回転を利用し、脚部側から粘土のかきとりを行ったもの思われる。53 は横瓶である。内外面とも回転ナデ調整が施される。胴部に口縁部を差し込んだ痕跡がみられる。SD01 に伴う遺物と思われるが、調査区外の出土であるため、遺構外出土として報告する。

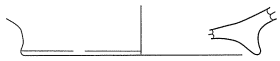
54、55(図－ 39) は石器である。54 は安山岩製の石鏃である。脚部が欠損する。全体に調整を施すが、未発達である。左側面に多く調整を施す。不定形剥片を素材とする。法量は残存値で長さ 1.8cm、幅 1.3cm、厚さ 0.3cm、重さ 0.63g である。55 は結晶片岩製の打製石斧である。基部が欠損する。表面の右縁側の調整は発達しているが、左側は少ない。裏面の刃部に僅かに研磨痕が残る。研磨方向は刃部に直行する。表面の中央部に、後世のものと思われる剥離がみられる。法量は残存値で長さ 11.5cm、幅 4.3cm、厚さ 1.1cm、重さ 67.77g である。



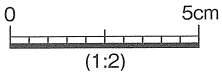
図－ 36



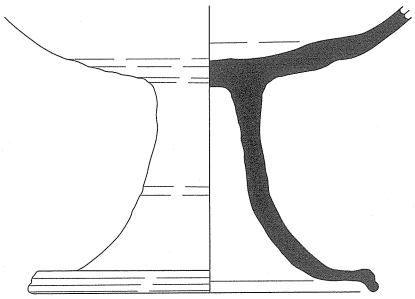
50



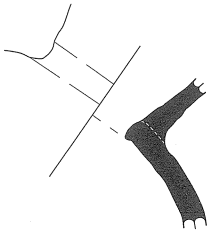
51



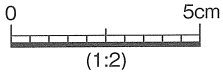
図－37



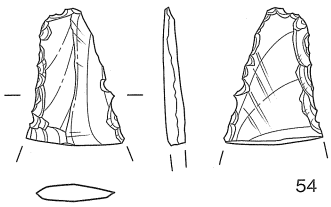
52



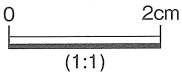
53

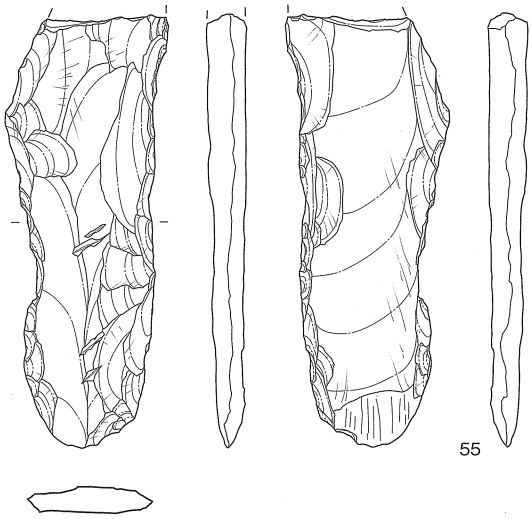


図－38



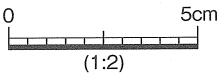
54





55

図－39



V　まとめ

過去、数度にわたり池の改修が行われたため遺跡の破壊が進んでいたが、幸いなことに試掘の結果、調査可能範囲が非常に狭いが確認できた。検出された遺構が調査区外に展開したため、部分的な調査になり、明確な遺構としては把握できなかったが、縄文時代後期から古代までの遺構・遺物を多数検出することができた。また周辺の遺跡からもこの時期において低湿地に展開する集落の存在が確認されている。本遺跡も同様の立地条件であり、周辺にこの時期の生活遺構が存在するものと思われる。SD01、02 よりまとまって石錘が出土したことも特徴である。また、SD01 の両端からは、同一固体と思われる須恵器の甕が出土している。胴部のみの出土であったため図化はできなかったが、他にも須恵器が多く出土しており、ほとんどローリングを受けていないことから、本遺跡に極めて隣接して、古墳時代の遺跡が展開している可能性が指摘できる。さらに弥生土器をはじめ土師器等も多数出土していることから、本遺跡の周辺には、縄文時代後期から古代まで長期にわたっての遺跡が存在する可能性がある。今後の調査によって横田遺跡の全体像が明らかになることを期待したい。

埋蔵文化財調査士　利屋　勉

参考文献

柴田昌児 2000「伊予東部地域」『弥生土器の様式と編年―四国編―』木耳社

西川真美他 2005『願連寺泉遺跡 2 次・願連寺元泉遺跡・願連寺建ヶ内遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

横田遺跡Ⅴ区　遺物一覧

番号	出土地点	種別	機種	部位	法量 (推定)[残存]	色調　外；外面　内；内面	調整　外；外面 内；内面	備考	図	図版
01	SD01	縄文土器	鉢	胴部		外；7.5YR7/3 にぶい橙 内；7.5YR7/2 明褐灰			9	9
02	SD01	縄文土器	鉢	口縁部		外；7.5YR6/4 にぶい橙 内；5YR5/3 にぶい赤褐			9	9
03	SD01	縄文土器	鉢	胴部		外；7.5YR6/3 にぶい褐 内；5YR7/2 明褐灰			9	9
04	SD01	縄文土器	鉢	胴部		外；5YR6/1 褐灰 内；5YR7/2 明褐灰			9	9
05	SD01	縄文土器	鉢	口縁部		外；7.5YR7/2 明褐灰 内；7.5YR7/3 にぶい橙			9	9
06	SD01	縄文土器	鉢	胴部		外；10YR6/2 灰黄褐 内；7.5YR6/2 灰褐			9	9
07	SD01	弥生土器	壺	口縁～頸部	口径 (11.5) 器高 [6.2]	外；10YR8/1 灰白 内；7.5YR7/3 にぶい橙	外；磨耗 内；磨耗		10	9
08	SD01	弥生土器	壺	口縁～頸部	口径 (11.3) 器高 [4.3]	外；7.5YR6/8 橙 内；7.5YR7/6 橙	外；ハケ、ナデ 内；磨耗		10	9
09	SD01	弥生土器	壺	底部	器高 [2.3]　底径 6.3	外；5YR6/6 橙 内；7.5YR6/2 灰褐	外；ナデ 内；磨耗		10	10
10	SD01	弥生土器	甕	口縁部	器高 [2.1]	外；7.5YR8/4 浅黄橙 内；10YR8/2 灰白	外； 内；		10	10
11	SD01	弥生土器	甕	口縁部	器高 [7.3]	外；10YR7/2 にぶい黄橙 内；10YR6/2 灰黄褐	外；磨耗 内；磨耗		10	10
12	SD01	土師器	壺	底部	器高 [2.3]　底径 4.4	外；5YR7/6 橙 内；5YR7/8 橙	外；磨耗 内；磨耗		11	10
13	SD01	土師器	鉢	底部	器高 [1.5]　底径 (5.0)	外；5YR6/6 橙 内；2.5Y7/1 灰白	外；ナデ 内；ナデ		11	10
14	SD01	土師器	鉢	底部	器高 [4.0]　底径 (3.4)	外；10YR7/2 にぶい黄橙 内；10YR7/2 にぶい黄橙	外；磨耗 内；磨耗		11	10
15	SD01	須恵器	壺	口縁部	器高 [3.6]	外；5G5/1 緑灰 内；N6/ 灰	外；回転ナデ 内；回転ナデ		12	10
16	SD01	須恵器	杯蓋	底部	器高 [3.3]　底径 (10.9)	外；5Y6/1 灰 内；2.5Y6/1 黄灰	外；回転ナデ 内；回転ナデ	自然釉付着	12	10
17	SD01	須恵器	杯	底部	器高 [4.1]	外；10Y8/1 灰白 内；7.5Y8/1 灰白	外；回転ナデ 内；回転ナデ	穿孔	12	11
18	SD01	須恵器	杯	底部	器高 [1.8]　底径 (8.2)	外；N7/ 灰白 内；7.5Y7/1 灰白	外；回転ナデ 内；回転ナデ	貼付輪高台	12	11
19	SD01	石器	石包丁	未成品	長さ 12.0cm 幅 4.9cm 厚さ 0.9cm　重さ 69.14g				13	11
20	SD01	石器	石包丁		長さ 5.1cm 幅 10.0cm 厚さ 0.9cm　重さ 56.48g				13	11
21	SD01	石器	打製石斧		長さ 15.1cm 幅 5.5cm 厚さ 1.6cm　重さ 145.69g				13	12
22	SD01	石器	石錘		長さ 8.8cm 幅 9.2cm 厚さ 2.0cm　重さ 310.79g				14	12
23	SD01	石器	石錘		長さ 10.6cm 幅 7.7cm 厚さ 1.9cm　重さ 238.98g				14	12
24	SD01	石器	砥石		長さ 5.9cm 幅 3.7cm 厚さ 2.4cm　重さ 86.53g			砂岩製	14	12
25	SD02	弥生土器	壺	口縁部	器高 [1.9]	外；10YR5/4 にぶい黄橙 内；10YR6/6 明黄褐	外；ナデ 内；ナデ	斜行文	17	13
26	SD02	弥生土器	壺	底部	器高 [4.0]　底径 (7.0)	外；5YR6/3 にぶい橙 内；10YR7/2 にぶい黄橙	外；磨耗 内；磨耗		17	13
27	SD02	弥生土器	甕	口縁部	器高 [2.1]	外；10YR5/2 灰黄褐 内；10YR6/3 にぶい黄橙	外；ミガキ 内；ナデ、ミガキ		17	13
28	SD02	弥生土器	甕	底部	器高 [1.9]　底径 (4.7)	外；2.5YR5/4 にぶい赤褐 内；5YR7/3 にぶい橙	外；ナデ 内；磨耗		17	13
29	SD02	弥生土器	甕	底部	器高 [2.0]　底径 (2.0)	外；2.5YR6/6 橙 内；2.5Y7/1 灰白	外；ナデ 内；ナデ		17	13
30	SD02	弥生土器	甕	底部	器高 [2.2]　底径 (3.1)	外；2.5YR6/3 にぶい橙 内；10YR7/3 にぶい黄橙	外；ナデ 内；ナデ		17	13
31	SD02	土師器	甕	口縁部	口径 (19.0) 器高 [5.2]	外；2.5YR6/4 にぶい橙 内；2.5YR6/4 にぶい橙	外；磨耗 内；磨耗		18	13
32	SD02	土師器	甕	口縁部	口径 (19.5) 器高 [2.8]	外；7.5YR6/6 橙 内；10YR7/3 にぶい黄橙	外；ハケ 内；ナデ		18	13
33	SD02	須恵器	壺	口縁部	口径 (13.3) 器高 [4.4]	外；10YR6/1 褐灰 内；N6/ 灰	外；回転ナデ、カキメ 内；回転ナデ		19	14
34	SD02	須恵器	壺	口縁部	口径 (21.1) 器高 [3.2]	外；N5/ 灰 内；2.5GY5/1 オリーブ灰	外；回転ナデ 内；回転ナデ		19	14
35	SD02	須恵器	杯	底部	器高 [1.7]	外；N6/ 灰 内；N6/ 灰	外；回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内；回転ナデ		19	14
36	SD02	石器	磨製石斧	刃部のみ	長さ 7.3cm 幅 5.6cm 厚さ 2.0cm　重さ 126.01g				20	14
37	SD02	石器	石錘		長さ 10.5cm 幅 6.4cm 厚さ 1.6cm　重さ 194.77g			緑泥片岩製	20	14

番号	出土地点	種別	機種	部位	法量 (推定)[残存]	色調　外；外面　内；内面	調整　外；外面 内；内面	備考	図	図版
38	SD02	石器	磨石		長さ 10.2cm 幅 8.4cm 厚さ 3.6cm　重さ 404.44g			砂岩製	20	15
39	SD02	石器	磨石		長さ 7.6cm 幅 9.1cm 厚さ 2.3cm　重さ 228.52g			赤色頁岩製	21	15
40	SD02	石器	両面加工石器		長さ 10.2cm 幅 7.8cm 厚さ 3.3cm　重さ 274.29g				21	16
41	SD02	石器	不明石器		長さ 13.0cm 幅 8.8cm 厚さ 1.9cm　重さ 309.07g				21	16
42	SK01	須恵器	壺	口縁～頸部	口径 (14.8) 器高 [5.3]	外；N7/ 灰白 内；N5/ 灰	外；回転ナデ、カキメ 内；回転ナデ		26	17
43	SX01	古式土師器	小型鉢	口縁～底部	口径 (11.0) 器高 [7.4]	外；5YR7/6 橙 内；5YR7/6 橙	外；ハケ、磨耗 内；磨耗		28	17
44	SX01	石器	石鏃		長さ 2.6cm 幅 2.5cm 厚さ 0.6cm　重さ 4.88g			安山岩製	29	17
45	SX01	石器	石鏃	未成品	長さ 3.2cm 幅 1.5cm 厚さ 0.4cm　重さ 2.49g				29	17
46	遺構外	弥生土器	壺	底部	器高 [3.7]　底径 (4.3)	外；5Y8/2 灰白 内；5Y4/1 灰	外；ナデ、磨耗 内；ミガキ、指押さえ		36	18
47	遺構外	弥生土器	壺	胴部～底部	器高 [7.3]　底径 (3.0)	外；7.5YR7/2 暗褐灰 内；2.5YR6/6 橙	外；ハケ、タタキ 内；ハケ		36	18
48	遺構外	弥生土器	甕	底部	器高 [1.8]　底径 (3.0)	外；2.5Y4/1 黄灰 内；10YR8/2 灰白	外；ナデ後ハケ 内；ナデ		36	18
49	遺構外	弥生土器	甕	底部	器高 [1.2]　底径 1.0	外；2.5Y8/1 灰白 内；2.5Y8/1 灰白	外；磨耗 内；磨耗		36	18
50	遺構外	土師器	高杯	杯部	器高 [5.5]	外；7.5YR7/2 明褐灰 内；7.5YR7/2 明褐灰	外；ナデ 内；ナデ		37	18
51	遺構外	土師器	杯	底部	器高 [0.9]　底径 (6.2)	外；7.5YR5/4 にぶい褐 内；10YR5/3 にぶい黄褐	外；ナデ 内；ナデ	輪高台	37	18
52	遺構外	須恵器	高杯	胴部～底部	器高 [7.3]　底径 (9.0)	外；N7/ 灰白 内；N7/ 灰白	外；回転ナデ 内；回転ナデ		38	19
53	遺構外	須恵器	横瓶	頸部	器高 [2.3]	外；10Y7/1 灰白 内；N7/ 灰白	外；回転ナデ 内；回転ナデ		38	19
54	遺構外	石器	石鏃		長さ 1.8cm 幅 1.3cm 厚さ 0.3cm　重さ 0.63g				39	19
55	遺構外	石器	石斧		長さ 11.5cm 幅 4.3cm 厚さ 1.1cm　重さ 67.77g				39	19